随尾　三拾九　四拾

番外書冊

漫筆雑考

類	號	函	架	冊
和書門	二〇七八四	六〇	八	二八

消印

内閣文庫

類	號	冊	架
和書	二〇七八四	二八	二一一函 三〇三

（十二ヵ）

内閣文庫

番號	和	20784
冊數	28	（20）
函號	211	304

内閣文庫
日本政府図書

塩尻巻第三十九

日迅

浅草文庫

朝庭の楽官十七家春日伶人十七家天王寺楽人
十七家初ハ官府の俸春日神領天王寺の寺産を受
其跡小録ひしが近年和加神南村（和加ハわかみ 神南ハかミ今ハシンナント）
也 迄て秋米弐千石の地を三下楽友の順ひ下りし給わり
各家分配せり（和の楽友ハ左方天王寺 右方ハ奈良左右也衆）
今上新殿遷幸の時奉行尚長朝臣（甘露寺 左中将）兼日
行事之上御辨当参新造内裡奉仕御装束當日

之早旦神祇官奉仕大殿祭先諸卿参集陣次
奉行職事仰召仰之事於大臣退去次上卿令
官人軾次上卿以官人召辨仰御輿御装束事
辨退去次諸卿起立出御南殿代之御御帳前
内侍授釼璽候御帳左右近衛引陣次公卿列立
陰陽頭奉仕反閇次闈司奏次女納言鈴奏次中務
省取版位次寄御輿於簀子上達部将離列階
下 掃部寮敷筵道 次上達部将上藺外階
輦戸進持御剣内侍前跪取御剣入御輿退候
宸儀乗御 大将称警 次更進持璽内侍前

取璽入御輿退候 次御同輿（御生母ト云） 次又初将
参進開輦之戸降階加列次御輿出御於御門
下大将仰御綱諸臣供奉前後御輿到兼明門
神祇官献大麻雅楽寮奏音楽次御輿入御兼明
門暫留陰陽寮散供咒術前行次公卿立南庭（東面
北上） 次奉安御輿於南階簀子左右大将及将候階
下 次上達部将参進開輦戸取剣璽授内侍宸儀
下御大将称蹕 次御同輿下給次初将更参進開
輦戸降階退去 次立御母屋御帳前内侍取剣璽
候左右 次撤御輿 大将上達部等退加公卿外次

中務置版位ニ 次ニ少納言鎰奏
宸儀入御清涼殿（掾敷 延道）次諸臣退出 着御直衣更出御
晝御座ニ供五菓ニ陪膳ハ典侍役送ハ女藏人次入御次供
夕御膳ニ陪膳藏人頭役送五位藏人次於ニ直廬ニ藏人
覧吉書（先官方 次藏人方）次下ニ吉書於伏ニ座上卿ニ次上卿奉行
如例 次諸臣退出
宝永六年十一月十六日 天快霽
同日夜 内侍所遷座
○仲冬十六日 主上新内裏へ遷幸ありしかに鳳輦
の上にはるかに鶴の舞ありけりける残瑞を千とせのためしも
祝しあをまれけるに
中院 從一位内大臣源通茂
四つの浦に年經て住る芦田鶴の雲井にのぼるけふの嬉しさ
○式部卿藤原為猛ハ幼童にして後硯御院御製尾ハ
ある年なりし室の侍人二階堂集る書写をなすとく
藤原入御しかつ〳〵雲の上のむかしを忘ませて
なれこさ有由吟し百てしふかうされかくもましして一首
の御製残ゆさる
東福門院の言をき随ひしけるにかのそれり例よしうさへ画君を
為猛いと恭きみすかに光弘の孔よ新日家よ

続して宮方の軍事に志有し勇功の名あり其子孫
相続して武家大将東武の時より奥加茂籠郷を領
せし天正年中まで家相ひたり（寛永年中薬苑 中古奥州苑へ移したり）
○太平記加茂神主改補の事参考に載る時代相違なれは
少なり其子久貞久ハ何の家ぞ同加茂百六十一家の上
職七家之 鳥居大路（成平斎） 松下（成久斎） 林（平助斎 尼位一姓）
は三家なりし名乃之是従加茂の三家と称して
森（経久斎） 梅辻（松下義流 三位始） 富野（泰广流） 岡本（林斎流）
は此家を合て加茂七名字と云其子久家貞久ハ松
下家之（賀茂系譜）

○山国の庄本郷常照寺に釈迦の本像あり其国の住寺の預るなりし一旦荒廃の後宮司仏像のなき
限なかりて捨置ハ火にて焼失せし後人々の像を
おしこ火の中より取出せし後修補を又取りて再興して
安置せしと云
○辛卯（正徳元年）六月大有泰心公十三回の御忌辰に千部御
読経ありし邦君御参りの御装束
初日（六月九日） 御中柄（中日後同し）
御冠厚額（紫組 老懸） 御直衣（縹御紋 三重襷）
御指貫（縹紫 立襷） 御檜扇 御草鞋（サウアイ）

御太刀 近衛將大夫三人随身六人布衣十三人
赤衣以下如例御医師六人橋一人御陰陽一人

中日 六月
二月

御衣冠 御袍 ワルハニ御紋菊立涌 御奴袴 香藤

猪頸 六月
八月

御束帯 御袍禁色 御紋輪無

御大帷 紅ノ袖単 御襪 紅ノ重紋

御表袴 禁色 窠ニ霰 玉帯 有紋巡方

御太刀 平塵蒔絵 御平緒 紫緂

御笏 御浅履 供奉諸大夫三人
束帯

以上

○雪のをもしろうふりたりしあしたすゞのつぼねかに
り地なしして源氏あはれなるかいしくわかれをまてはむる人にきれ
まとへるに松の雪のしづれふかきよりつもる山里の心地
してあはれなりけるをかきまとはす花すへつむ と網の河のさわぎなるよ
ありつるへうなしもをかし 文橋の木にのぼりたるを小河童がゐて
撫たてゐふしやみたる松の木の枝のれをとりかへり
てさしこほるゝ名に立すへのしるきかんと 古歌に我袖ハ
係立すへの松山なるけし波のさえぬ日そなき あるやし帯の松の雪のさしと云へたる
まてりしかうせていと面白きれしさ残見ゆるしく笑せ
むかなりさてたちしく雪の下に残いたりやうて書よ

うつりて卯月の初つかたの宿れ歌かくとて東の妻戸
をしあけたれは向ひなる廊のうへにかくあるはれたれは
日のあし程なくさしいりて君がしめりたる光にほのとけ
さやかなるをかれらなかんとかきしさわかし春の眠のさめ
がたすゞしかりし宿を志しかくろへたるも更にこの紙に
及ぶべきやは彼巻のつましよみし歌のことばをしるして
おもひけぬ影の勇ひし象袖にむすびけれ紙に君の鏡に大
いさつくとまじとて見ふ人ゆかんかし世辞に似ぬ己忌哉
さしそこはや深くよみたるらし見て又たかし
○霜月ありのえ　野坊翁
神無月いとゝ夜寒の里かれて漏ぬとのみと袖にしたゝる
○菩提院の大師禅初夜の懺法に参り恵明にしと志つ
かの自根塵を拂ひ侍る心なぞまる安樂行品般若助
書やしかの源入經を見十方佛と誦せらるを以て
正方の山さかう自然の書の色哉志川さ窓の光りまさりし
古日の曙月らすく海りて初君しろし堀りけりしれ
しふとみけむ口が語さへ口かりしつとめて六如師へ書つく
便よ
悲よつて第ゝ福哉婦かぶし珠数えかと網の初君
菱重要文とこして

かやうに日数ゆるして晴初る雲まの月なき宿の村さめ
浮雲ハいさゝかもとも雑風志けしなかさそ本より泊者
あまた人ともに君のいつはりて君を棄て少しも無かりけり
始よりも不かれし心いかりもくずかにかわん覚へ下なと
いふは情なかりし事すきものとものつしなとらひのく
しるに一名をたとへてとるの事しそ何しくいかし
行れ路次にとりへを泥ちなす人りまゝきてほとりとく
もしなく姫よ云ひそ情あれいふよむつきとき
若き月君ハしくに電させる三家をあれつれしたハ絶よし山里より帰る宿成なか
とうた のまんし俊成の間人によろこひてすへてのへかひをかりそ

らしおりしの繁ける称としこ志つとき健よ村民の貢
東方を今わしたそらしとる様あすの人とする人数民
三家あり行く丈風を新しるそ罵りハ天の政成を志て
げる凡庸居帰るなすきにやまひそ無かり初君の
あしたまでも安へきるいわりし都下郡なしの泥土
洗足君事を来るをうれへ彼りいさこそさもかれ家の
かりしとも随ふに人の田舎の作よ習ひける事
さ田舎すり云家にかりして漂きすし此上月宿並つとめ
かりし人の定むる時なりて来つらするは日数成遠れ魂す
脱きる若竜まして来るものも南きし袖ハ密君相風

のあるに雷をいとはん人に埋りまりて己えんをおそして
るすべしましき男の何のみよき街頭の雷を婦人て
これ故訶罵せられんし者よそとも爪し噫梅梢香
しく雪花まる新なる農ね炉を圍温粥を喫し
静に去故とりて書跡なる宋儒の秘蔵して心や
ましめしむかしうりわる窮年。。としても人の契ふと
硯えびね用去女解嘲を作まるを
梅花三五點晴雪残清誰識蝶身夢炉辺百念軽
○仲冬十一日京師時なるに迅雷こん耳を掩ひしやの
て自にの人行て立家数十戸焼しと希有なりしと

京人の文に見へし雷鳴のをそれは夏の初なりし況
火災ハ大かたに隆冬にしげきも時ならし聞を驚し
見るめきつきを知らぬもりあるは定あるき世に物事ある
遊さし男ハ時をやハ誌べき二年迅速なりして出生息
のあて志て要命なるすの残未の何ましにこれ我
男のつとなるきを慚愧せさるべんや
○小君 光雲院大丈人 九七ヶ日の都で由へりあくもさんありける
比つるへまいかとし人の婦か里へ帰りゆくべき日をそく
きこへしよりる女房
南れ行張添の梦我痕跡し菜ハ人すかしわかれしえへ

十二月十八日霊牌徳真山に立たまひ近衛の氏法会
まもりまゐらさせ給ひけり

○淑室友孀人小祥忌之辰恭拈二一瓣一香ヲ

雪峯

栝片炉頭一線ノ風　遍薰十刧覚輪中

逍遥自在霊天。　松響夢破只碧空

奉和

炉上引ク愁古林風　残鐘夢暗紫烟中

驟隙迅駒追ニ日月ヲ　一片清輝往事空

因法會して一百万遍の聖号を唱へ華臺を厳
飾し威光法焔輝しまいらせ回向深りし香を
薰まいらせられしとぞ

青宮桂月照二空狀一　白雨洗蓮薰二佛場一

百萬希風満沙界　天冠地履自清涼

忌日ハ初秋なれども中元の節に遇り。三年ヲ
おしなべて修行ありしが月中の一日七昼の
誓をむすへ〳〵一巻のつさん法花修しまいらせ歯
月大雄山に龍く従兄を請し施食及ひ晨朝
の禮讃経念仏なといとなき修る嗚呼去年まで八
華誕を祝して千世までといのり侍りしをけふは塘を

菖花し回轉しまいらせ候いとくゆかりなく村
雨の通りさためなき豊今下時に無れ問る袖を
押侍りし
もとて我ちりゆし秋となりふみも袖に先立袖の村雨
なりし友の前をとりし歌をおくれ侍りて
荻の葉ふれをとつれそひ秋なりといふに過ぎにし代の旧跡
しかをこりしをわすれなりける
友なる人久しく東に旅り端午の日帰りしとて文の
次に手をとりし 六月の手翰
三年為客自堪憐　強對蒿華淚潸然
官舎蕭々愁臥程　不聞郷信却聞鶴
と吟へしこそわすれなき旅寝をすくしとて
容情入筆幾回憐　武野懷遙眼悄然
孤枕夢飛千里月　暁窓空聞一声鶴
重ナレ共 云爾外ニ奏之段ニ不除
○近世茶蘭とて香あてもさし花をすてなそぶ色を葉に
莉なりといふ人なれといさゝかころこしの事を考ゆ、
苍容たちへり花繧の道生八浅皆まいつる真珠蘭
一名真子蘭といふものなれなり
草木の事
仙人條 南陽鞠潭十九を掖するにいとりんげの花今云たゝの孔雲ゐて野大酒といふ大になけさる草なりしと名へ

荷包牡丹 一名魚兒牡丹 けまんさうなり 長春花 花錢を結ぶがごとく戒俗に云ふ いちごの長春こそいふし

これ今盞草の事之 秋牡丹 遍生八瀬なり接骨木のごとくにあいきくとかしらい
世にきんせん花といふ きくしきまきくなどまるくの係孫多く異ハ

きくに行まして 仙人掌 花壇をとんてぬさくら 總木数子樹 蚊の
花きくのことし きろかものなり やと

りうと 柃櫸(ヒサキ ケヤキ) 櫸と一致にして又 槲櫪 タモツハキこまり 橿 ハテカ
呼ふ おの木なり ミとハおえや なりし

山茶科(りやうほり) ハタツ一つり 虎耳草(ユキノシタ) キジン草 淡竹草(ツキクサ) アナ巻なりし
花なとるは云

夏のうつろひやすきゆゑ
なと称よふあり

節に書留しよやうまとれし右其一二を筆してのせたり

○正徳四年之 甲午年八月九日の初したより暁がいとしう吹て物さハかし
らしまなく風たつまゝしら雲頻北に移て心すごくぞ侍りし
三河尾張へはれの外の西風にて洪水をひきいたしく数百餘人の

亡びに絶侍る民家の愁さここそと思へ侍るに漢人下戚风
を侍りて悼ひ侍へり 南風に倚く沖津くきし奥いとゑく飆多
個まるる利まけへなり
されば愁夜なかりし虚妄なる物語河をも執してふかく
あはれさ物すきうちに歌作る過ぎさ風ハ袖なく秋の初風吹は
しまてしく思ひ侍りしまゝ物にうさつけ侍りし

瞳遠㶚村老樹幽 雨晴雲底夕陽収
素風林下徽琮夢 喚起一声芦荻秋

○霊遊つる比雲晴さえ西後夜出そくまそて月も見かりしる
八市門寂へ上て遊人歌笛の音もさそこへ侍ふまで十六日
の夜初さくて流て月さいやうに秋の灯も上宵一夜の

各おこりしとみなとて、何とも思はす　府下風俗十三ノ又六秋暁灯ス

市井残灯習俗同　夜涼払ゝ席世縁空

乾城槐夢轉為非　隻影月寒白首翁

○盂蘭勝會排榜を手てらし

彩雲靄ニ玉樹一　清沼布ニ金華一

又

蓮池露爽(サハヤカ)　眼界繁金風度

蘭階霧霽　靈臺静素月澄

○文月中比むすめよを飛し人をこみしく作りて

萩の葉ふりに露ちり初る風の音も今年よりいきて袖ぬらさん

已上

袖ぬらすまて露けき秋とふ小萩の葉ふく風色かはりて風そよぐむ

○或人問盂蘭盆経に七月十五日百味の菓を設て仏に供すと

云菓とは何をいふと律の中に核果李柳杏のたくひ　膚果

梨なつめのたくひ　殻果やしほのたくひ　檜果松柏の実九年なりしき果之　角果

大小豆さゝけなとやうの物をいふ　是を五果と云也

○近世郡鄙商家毎に立用の利を事とし米穀年ごとに

高くして人の憂多し今歳甲午三徳ニ我府下金一両ニ

新麦の斗三百位をとりふれる其他諸物の価之を是に

準して安りしまた剰へ銭すらも立用して交易私多しされは

金壱分を銭四貫八百文とす士庶これに
苦しむ七月の初旬より諸所等の市人諸貨三割の利のより
直増して欲につのられ侍されば商人多くは是を罷まて
しも只ぬさま人欲の甚しき渡世の風俗なき痛但
士も又稼穀の事業をのこ捨て庶民の歎を忘れ侍る
おれ不仁のありといふべきものゝ
○享保元申年八月八日の暴風未刻大風海中より汐ひゝりて鳴動し八日朝より雲北より飛申の刻より風荒く子の時迄
瓦を石を飛し木を抜きありとよむ音雷のごとく驟雨
電ことして宮殿すべて破れ倒る屋舎さながら轉覆
して其の侍りし斃死ものは多く夥しく市井村落悉く

なを塩はさりじふ歩し五十りなり国国の秋を文欲く
そのや魏国の方には汐湧り来りて陸を浸し堤破
猶ほる船乱れて波瀾し家流されて財を沈む川に洪
水激して畔畷靡沒して霖二萍号（リンシヘイカウ アメノカミ）情なりや人民の愁声
今鄰は衢頻の恨訴となりて世もたまゝ押収まよふ
猿賤（ナホカセ）に動しもとて己が心をとゝこふりしもあるき蝸廬の
なるぞなるやまされ侍るつゞりしをまもふよたゞよひ屋かり
頻こぼれ宵暗や闇ましく之を大災の後さき察しあらし
あさを且つ口がつけみとりの風から是ひすて侍るさて見るま
むかしのうち驚き侍る道筒の寿すまゝかゝ中を通

理を没て思ひ定めぬ、わけなきことゝ云侍りし或書
つ閑かにされハよ大かたに浮世を思ひすてぬさぬ長者にても
をのれ惜るかる風なりたゝ心を執し侍る所と云も大断
の胡卸[?]背にさしそ思ひもたり侍らんと我なりしつれ
なくあさ谷[?]りてそなけ[?]侍ると人よ知しかしぬさハ
我も人も大命に随てこさるなき者を指見害に似して
たゝまけ[?]る擢[?]をまかせさる者ハいくまゝ取[?]やや来北[?]
多身ハ只秋貢のかゝらんをを思ひよして民の国な急
も農家ハ又かゝるやせさけられなんるなあかりしめあり
なりに須家の勝[?]にはなくハ卸[?]ぬ心よさきなる小破や合ぞ

思ひ志かるらんなどの志るも浅ましなれ子ハ上下詰
なくるなく没有工夫一向貪吝のことなるどもすくききる
なされハ商賈ハ詐[?]盗叩して詐欺[?]の価を増しなりハ
糶をとゝの歳[?]を隠し法度[?]禁を犯して刑を顧
みず侍らばけさひとくよ餓狗の數[?]由[?]鑽[?]揆[?]謡[?]の如し
終り撫[?]よつかられ家の衰[?]するなりて止る者[?]すや
嗚呼霜[?]ハ多く一眭[?]のりわ梯[?]よ梯をとりて数[?]令[?]の利を
進ハ空しく上の月をも榜[?]して東塗西抹[?]にて兜峰[?]
玄哭[?]をなまで揺尾[?]嫌[?]をんの恥たからなと忘れるなるをいや
かくなる心もよこしまなにうこさ出侍らしそうしたてゝいさ

まして此一夜よりこもり給ひし風客の庵の月も増りて
かの面の白髪のふりの是なら也なりけるかこし依数の
拙きさま思ひとつかしき厭穢の心さしよりたるをと
愁苦病骨を纏ひつゝ薬を抹するに急がん日何事を
か捨けるとして軽も歩り坊仏らん如くしや散さん
露の身ハ迚もかくても可なりける華第茅舎門し嵐に
乞てるさき有後満月の風露滝々として一斤の秋光
爍々たり更深漏静に月落河傾て万籟倶に
寂寞たる暁遠く浮世の姿雲勝風情の空すさく
尽る事にあらて はかなしけれ人の身の果無さ又一概ならぬ

かハ聞し浦る萩の葉にもやとりし露を比登夜にて
虫の音いとせつ秋のあはれを今一入に覚え秋を通て
なきまくのきりぎりすまし鳴やいそちの涙をふとハ
太ゞ露に隣觴とおもしうちむし佇りてきりぎりす棄
事とも多かりしかば
見し松ハ友となり今世の中に洞のこゝろこそるをうつ
有津芽原うろろふ思よふさうって吹ハ似ぬ風
の音つれ
〇岡崎能見松應寺ハ廣忠公御廟所御躰山墓なるハ
清康公の御嫡男廣忠公菩提所也

○鴨田村大樹寺　浄土山と号す二ノ八御道山ハ寺也り七百石の寺領なり

○松平村高松山高月院ハ松平氏代々の寺なり　松平より七平あり

瓜用　椿平　胡桃平　萩平　萬平　小市平　羊平

桑羅平なり

○岩津村信光明寺ハ弥勒山と号す　百八石寺領

○妙心寺ハ法性山と号す　妙心院殿ハ寛正二年十月朔日

逝去　百一石四斗の寺領也

○二村山法蔵寺　八十三石の寺領

○明大寺村ニ是の字の寺とよふハ曹洞流中の古刹

龍渓山龍海院の事也之　百石寺領　清康公此寺ニて是の家紋

昔かんまりし開白の上人と相せさせ玉ひける天下取

者給ひしめさるへきとの御瑞夢を見せしとや　御牌一堂

の菩提所也之

○坂下村光伴寺　昔ハ廣忠公ちとらハ　廣忠公御分骨松平太京

亮大政の由之

○亀尾山安養寺弥勒院再興縁起序曰当寺蓬莱

興之地景松風颯々弾琴寂上乗之道場桂月圓堂

斬威神和光垂鎮座

私云亀尾山ハ在本州愛智郡那古野庄若宮三所

鎮座地也

金亀円然受霊亀尾亀尾山号由此者也
按亀尾古訓奈羅於今或称奈奈於者其轉語
私曰奥田神宮寺亀頭山ハ今木津山カナカキナリ那古野所当
北方故称亀尾
開基者円僖都受法四国住居平尾張東海武州
伐海法印受明灌頂秘密印金悉皆傳授
者円ハ後醍醐天皇ノ胎人中嶋郡大須庄真福寺
能信上人依者円而受受明灌頂大柄流是之
本尊弥陀異像奥田八剱御作而座下数異剱云々
此像至近世安置天王社本地堂者斉法印在住之

服部志氏為知多郡大高村長寿禅寺本尊是
古若宮本地佛而安養寺十二坊本院本尊也
私按是神名或所謂孫若御子神社歟旧記無ハ
幡号而次録牛頭天王社上 弥勒院堯照天王年中
所筆不動維摩供次第筆若宮并天王云々
享禄五年壬辰二月十一日軍兵入林皆悉焼亡云々若宮
三所牛頭天王等神社及寺院十四坊焼天文七年
再興八年八月十七日入佛開眼供養是弥勒院再
建而若宮亦重建也
奥書曰天文八年八月廿一日権大僧都堯瑜堯瑜

堯照上人所弟也

右ハ天王坊考古縁起の文を略す寸誠公保丈山撰の時
再鍛記より出たりしハワカ宮の祠天王より上なることを
云隠しけるにや　又楼をうく小野田神主なる者ハ信明天皇
の勅願にて代々官符を申し重徳のうる小野田
島島小むかし亀形の丘ありて亀の形南に向ふとかり
名所方角抄にハれハ神まうをを亀の山円福寺ハ亀井の寺と
峠三光講寺の亀尾山と称せし　当寺ハ小野田の正
北なる亀尾山の称なるへし　今の亀尾天神と安養寺
等の時境内なる同寺も唯併なり　安養寺ハ亀尾十二坊の

起号なり

右婚尾方一巻より九二巻迄小川氏か序を丙作の注より
借り得て闕を補ふ

〇

一日入書肆見一帖子名靈會日鑑俗所謂過去帳也
其終書教行字曰吳會鑑出矣或譜天子歷代異子世
紀通曰神后皇后只居攝政不嗣正位而称十五世者不
得允當故以應神直兼仲哀又齊明称德乃以存
謙皇極重立之号不列世数退後堀川立九條院外光
嚴等五主内南朝三皇神器北遷而後嗣正統於後
小松是皆流兒由日本通紀而記長随通紀行則貝
我事洋然我諜謹識云云

信景按ずるに皇統着記して実に元前なれども今の
学者は我が国史の実録などを見ずて偶記誦の為にこれをよむ
赤略と苟且として心を用ひざるに正閏の統をも失
するもありし義躁は落居氏なり能れても至らず
亦直之

○山城国愛宕郡賀茂別雷神社大 名神 是上加茂社なり
祭神別雷命
同郡賀茂御祖神社二座 並名神大 是下加茂社也
健津之身命　伊賀古屋姫命
同郡鴨川合坐小社宅神社

玉依姫命
世人誤りて上賀茂を建角身命とし下加茂の大社を
礼とふま又賀茂皇太神ハ神和の御事とおほゆるは
謬りなるべし山城風土記並賀茂縁起の旨ハ松尾に参る
大山祇命ノ御子のおとしはれしハ卯月の葵を松尾に献る
和歌など　順徳院御製
ちはやふる松の尾山のかけまてつゝくもちらく葵初けん
○旧事紀に記す松尾の神を用ゐる鳴鏑神といへり風土記に所謂
丹塗の矢思ひしを今はへさらむも又火雷なりワケツチと訓し賀茂
山の山号とする但ワケツチ山ハ愛宕郡山の山号なり

貴布祢ノ社一座今ノ社伝ニ為三座曰高靇（タカヲ）曰別雷神
曰奥御前也三千二社ノ疑ニ者ミ船玉命与ニ高靇二座一
○又下賀茂を大己貴命玉依姫として上加茂を瓊々杵尊
とする説往昔の伝聞に違ひ侍りけるや山城風土記の説のごとく
玉依姫と心得て害なかるべきなり
○葦原ト定記ハ後世の作なるやを思ふべし
○新日本紀に賀茂建角身命ハ大和国宇陀郡八咫烏
神社なるよし見えたり其御子玉依日子命ハ加茂県主等の
遠祖にいまさる玉依姫命ハ別雷命の御母なり雷の字を
以て雷神なりといふなりとぞ見ゆるを以て作る風土記ニ最祖

又を名可茂別雷命といふハ別角身命の意なり
○桓武天皇延暦三年甲子十一月紀船守を遣し上の社
に従二位を授けまいらせられし是ハ長岡に都を遷さるゝ
に依て其後代々増隆封戸の限りなくて帝紀にこれを侍る
されバ賀茂ハ山城国一の宮にして皇都の鎮之御崇
他に異にして内親王の奉祀を宗廟に等しかりし有智
子内親王を始りて土御門院の御宇禮子内親王まで三十
一人之元禄七年四月再興ありて近衛使の式御車のかざ
りも古へに立かへり侍るかと目出度ことなり
寛政云元禄七年四年再興ありしハ御祭の事なり秋院の御代ハ中絶
再興の事不分明之

○柳は蔡ハ欽明天皇の御時始りて人ハ蒼柱の始文残りけり侍よ
縁のあるからず蒐草よ唐集本雅のうちよ
恵みの神と君とのあつらづけある心よぞうけるといへる
人かし去の二葉の甚低よ暮ち去けしぬれハふひ草ハ
け葉ハ冬の二葉つねて秋とすその低之夜よとる葉草
ともいふ文木集師光の歌

そのかみの神のけの山のまろ葉草乃ふのみあれの志るし

又かさし草ともいふ

神まつる月ふのみあれのかけしちさ世かけて家やたのまん

実ハ細辛よて侍るとぞ葵の数ハ多くさあ之草稿
ニへありぬれと細辛を葵の数ハ見へ侍らぬ我はいりはて
葵の字残付しふや職ある人ハ葵の日葵をうけざるうや
新拾遺後京極摂政「まろ祖よ神ハゆるさぬかひる心
のかよかけてみえず花ハ嘉暦元年御光帯の後祭の日
御のれ乃帳よかけれる葵を思ひてよ衆めの(？)や

○嵯峨雛岳ハ淳和天皇天長二年正月十日弘法大師見
山求聞持の法を修し虚空蔵の像を彫し七寂也
しとく　明皇水　任佛谷といふ水也

○笑茶道人所制茶人天業傳奇制衷曲夜語曰曲之難有三
叶律一也合調二也字句天然三也當爲之語曰手反東須分

上去両手ニ還ス要辨ニ陰陽詩手詞曽有是乎又曰亦有三
易ニ云ニ云者可用ニ観語一也一折之中韻可重押ニ世方言
俚語皆驅使ニ也是ニ者皆詩文所無而曲所有也然亦顧
其用之何如耳可ニ草々即如賓白何曽可易須須理
成章方可勤聴豈皆市中叢談乎

第一折醐

西江月（末上口キ）頭上青之何物眼前楚之誰人山川如夢草
如塵花鳥偏能恨

第二折仙呂左候韻

比黙絳唇（小外扮小児紅衣三髻㧚花靴扮日月凬塵随上小外大笑介）一刀古千秋鳥飛兎
走乾坐受塵却無休笑破黙亡嬴口盤坐案上大笑三声介
信景曰笑蒼号負為堂人天楽傳奇有上下二巻
曲三十六折（元禄十六年之）癸未仲夏入書肆見之因ナ抜要

○伊夜比古神者越後一宮也のニ云天香山命神産五百石古
哥よりいやひこおのれかむさひ青雲のたなひく日すら
小雨そほふるたハ万葉集越中ニ見の中より

○今士庶之門ニ書天照太神守護八幡宮守護等之牓多し
矣嗚呼二所我宗廟以此号掲ニ卑賤之戸ニ無忌憚甚
也延喜神名式諱ニ天照字ヲ録ス太神宮御宥之書循然
况ヤ士庶読ニ神号一乎導麿一ツ背合祀官再效尤共責神為

業愚俗不学而不辨之可痛哉

右ハ徳庵前梅雨窓書一冊の内ヲ抜出ス

○霜月　東漢魯相韓勅造孔廟礼器碑曰惟永寿二年青龍在涒灘霜月之霊皇極之日河南京韓君追惟

大方ニも是十一月なり

○白氏偶吟匹如自後有何事應向人間無所求匹読作辟ニ和訓匹如身をすなはちと読む應向をゆかしめとたゞぬといふ事古注にありやなしや

○中野郷次助にて毒石を解散せし僧玄翁を指禅師といふ法を我山の碩公に聞しに石を割砕きし玄翁といふより彼僧殺生石を砕りしよりいふ

○鳥を懼れて偶人を作りしといふ云實は傍示の奇よ山田のそほづの事こそ古今にはれ秋ちかきぬればいふ人なしといふをそれハ云實は山田のそほづといひしと見へたり傍示の誤りて名つけたるなるべし

○明世宗封我肥後州阿蘇山曰壽安鎮國之山吏我冨士山以下名国名山多矣独封二阿蘇者何乎

按釈日本記十有下以阿蘇為我国中岳之説上故ニ哉

満特ニ請之然ルヲ乎

○菱家彰撰万葉ふさらぬる字訓の兆すときりの多し今略て

○まきのかくのことし

水上（ミヅノヲモ） 別様（ハクテ/ウタミ） 騎（タムケ） 早（トク） 限（タミカ） 初夜（ヨヒ） 不輸（イタサノ）

蜣蟬（ウツセミ） 夜避（ヨカレ） 浣（アタ） 服（キル） 日夕（ヒタラミ） 城（トヤマ） 花折（ハナカゲ）

織（ヲキ） 化（アダ） 涌瀬（タギツセ） 遊絲（カゲロウ） 假涤（カリソノ） 聯貫（ツラヌク）

幾（イッ） 朗（サヤカ） 神女（ヲトノ） 濱道鳥（ハマチドリ） 夕三里（ユウツクヨ） 不覚（スギガテ）

○日本僧家菩薩号七人

菅原寺行基菩薩　大谷寺光照菩薩 法然

招提寺大悲菩薩 覚盛　西大寺興聖菩薩 叡尊

光泉寺忍性菩薩　大往寺大乗菩薩 日證

立政寺興正菩薩 知道

此外久遠寺日蓮モ菩薩ト称ス但不詳勅授之旺ヲ

○尊者号二人

真言 密嚴尊者 興教大師　天台 天海尊者 慈眼大師

○国師号兄人禅師号一人

浄土 通明国師 法然　浄土 善恵国師 證空

浄土 佛立恵照国師 黒谷 等熙　浄土 普光観智国師 増上源誉

浄土 記主禅師 源命光明良忠　諸書作記故名季

○卷 卷字也 六書正譌為平声 十（ニフ） 是執切 廿（ジフ） 人汁切 二十也 卅（サウ） 悉合切 三十也

卌（シフ） 四十也 息入切

○薑を撤せざるハ往昔食饌にありし故なるを食せたまひして
醬其この係補し無疑ハざるなりと浅見氏の下講
文義明らかにして前川氏しと後より傳へし岩村氏が云やう
古注に詳なしハ今説あひくしと即曰四書便蒙孔
安国云齊ハ禁葷物ノ薑辛シ而不臭故不去史雖斎亦
不去則常食之有薑可知云云 浅見氏ノ傳識考ニ示
なりて志らへるなるべし又南史の蔡撙野ノ傳カ
孔孫不撤といひ百川学海にのする王荊公ノ事ニ貢父ノ言
おいてみる誤りなれ菜に孔子を勧めてまことに食せしむ
といへるハ一笑のなし

○藪田社重脩
伏見院正應元年　應永廿六年義持公
長禄二年義政公　永正四年義晴公
元亀二年信長公　天正十九年秀吉公
慶長五年　神君
貞享十二年
大宮　八釼　氷上　高坐御子美御井日割御子
上知麻々　大福田　一御神前　龍神　清水
左王　御田　内天神　南新宮
元禄五年造替

下知我麻　楠木

同六年

孫若御子　乙子　今宮　東西十二社 氷上末社

麻葺 八剱末社 八十社 同 徹社 高座末社 鉾取社

同十六年九月

二名新宮　龍田　賀茂　金社　月社　山ノ社

土社　浅間　王若宮　稲荷　山王　天神 以上天王末社

八剱 同 氷上 常世 南 居森

同年 高座 新宮 八剱 若宮 同 春日 同 住吉四所

神宮寺 号医王院自此為真言宗

不動院 本在八剱宮　愛染院 本三重塔也

十二月二日供養

不動院に安置する愛染の小像八剱熱田奥院の本尊と

此院は弘仁九年空海建立三重愛染院の愛染は八剱仁明

天皇勅建三重の塔の本尊なりし寛文の比は熱田世儀

寺の流になり山伏預りし其後破壊してより廃亡

医寿院に安置しとゞめたりぬ

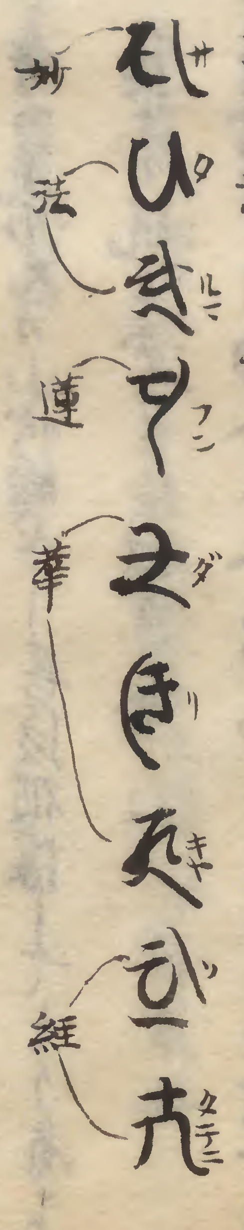
○惟足流神事は伯父といふ文字にて叔父ともいふ和語之と語り

伯母はいかんとぞ一笑すべし

或人長谷為麿にて有年の如くの時祭を神事にやと

都しに中ニ佛カウチンミクムモの神と崇奉りとかや神ハ六
条の年ハムチンミタでとい小神なりや呵也

○弘法法華開題



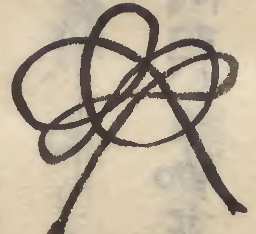
けみ字を以て胎藏の八葉の九尊の種子とす胎藏中胎の大日ハ帰めもじ之と密家の僧呑きたる鏡石集に見へたり

○列子儀渠之国其親戚死聚柴積而焚之燻則烟上謂之登遐 按するに東狄の大概かくのめごとく釈氏の火化のことに似たるをや

○造天地経云宝曆菩薩下生世間曰伏羲吉祥菩薩下生世間曰女媧摩訶迦葉号曰老子儒童菩薩号孔子又清浄行経 浄光童子往為孔子貴月明儒童子往為顔回といへり 実にて弟弥その隣の南に年の里に儒童寺などと焦子筆乗にあり

○浄土大士ともと往古今霊雲如来といへりとて登遐経に出つ

○流蘓



神佛の斗帳に飾る糸を総へかけるその名なり倭漢三才図会に見えけり楽器のかざりに幃帳にかけるるハ昔の代よりの後に始まりし哉森抜に見ゆ

○青燈風 神仙傳に出つ 西風の称之と 東風 代酔に出つ 冬風の事

○洞冥記 小懐夢草ハむかし漢武帝夫人を思ひ東方朔鐘山の香草なを献し七懐に入れむ帰夏にみへけり

不怪のことなれとも侍童の使にも見なし侍る

○老子云真人遊時各坐蓮花之上云云 是関尹令喜か傳に出ッ 釈氏仏像の蓮花にのせ侍るも方士か虚誕にならひて成し

○関羽を伽藍神とする事 楡溪漫志に関雲長か天師か受護法の陳妖僧智覬か傳臣王欽若所會私言至経誕とのへり（佛祖通載にのへたる所會の記しさある清の石にての関羽の出傳家山崇にのへり）

○倭画亀を摸ハ必毛尾をゑかきて見 古今注に三歳の亀ハ十尾を生せしといふより年久しき亀の事なるや 又一種毛亀といふものありとそや

○世本に云 共鼓貨狄作舟 黄帝の二臣也 白帖に云 古者観落葉ヲ因以造レ舟

○元の元貞二年 双燕栱湯佐か宅に巣くひし 家人燭を挙て梁を照せしに 雄燕驚き落て猫にくらはれける 雌燕悲鳴して不已 能く巣を守り雛を哺し羽翼を成して後去ル 明年雌又独来りその所に巣くひしか 毛か毎年只独り雌のミ来りて門にあるる六年にそ 人感して名つけて貞燕とよひたりとや 又明成化二年 淮安の漁人鶯の更の花陰にて其雄を捕へ烹し 雌悲鳴して飛廻して竟に沸湯の中へ投して死けり 漁人これを感して此あたりの

と并てくハおりしが人これを称して列誉といひしと
奴槐蔵おりよ言かりしとめりけ
○いしへ帝といふ帝ハ阿用出部碧石身持よ石地門よを
生せさりし亦のものいへり
○日本醸酒の始ハ仁徳帝又の名ハ須々許理といふ人道神帝
の時百済より来て作りそめし古事記よ見えたり
姓氏録にハ兄曾保利弟曾保利二人韓国より来り酒を
造り初めたるといへり又韓国の醸法にて此御代よ伝ハし卓
素といふ人酒を始めけり韓服部と称す姓氏録日本紀よ
あり疑らくハ卓素ハ後あらんと度會延佳いへり

○或問簸川の社正北古へ小祠ありて小石に偏形の石を
安置て俗に陽石の石塔といふ貞享造営の時是を廃
せり古記よあるや曰簸川ハ百部に御厳より北に御墓
ありけり合○ハ天神七代の御出ならんといふ説ハ一ハ出雲国
氷川上にて素盞烏尊斬たまひし大蛇の御舎利を僅み
御墓といふや此墓よ身て言の説あるといへり此国より委
説の甚しあるものにして陽貴形のものをいひまぜ後人の
附会し見ゆ
○元禄十六年
癸未の秋神宮寺弘円といふ僧元年の記空海以
大宮ハ竜源明王ハ被ハ不動明王と故大宮の後に本一字

然して雲珠の小像なれハ空海の像を安んずと見え大宮の本
地に弘法八幡社内に一ケ所不動を安んずと見え又八剣
の本地に祀せり然れハ往昔空海護摩を修せし所とて
今なお不動院小像の雲珠を並べ空海の像を雲珠院
に安置り古き記録を失へるに似たり雲珠院大像の雲珠ハ
もと神宮寺のハ三重塔の本尊なりし同社に最澄以前
此神東方主七仏同体との説にて神宮寺ハ薬師を安置り
もし天台宗の徒守りけるなるべし 又以為大宮ハ降三世八幡ハ観音之と九佛共
神宮社の本地を定むる説として是等の説も己に穏ならず
よりたる本なれハや

〇同社大宮之所祭考證曰一素戔嗚尊二櫛稲田姫三日本武
尊又宮酢姫又稲種(イナタネ)公

謹按に社傳に一天照大神第二素戔嗚尊とする（或姫神）
説に異なり延久八記録に不経の書としてしりぞけ又神の配位
ハ小像の事によりしに文非ずとふを見れハ天照大神と
思へる社多し地によりて一神によりし神託を知るべくに
採録して可也

〇神名式火上姉子(ヒカミアネコ)神社とあるをホノカミアネコト和訓せりし
後に今の社家ヒカミと唱ふハ訛りなり帝王不知和訓知て採
りしとなべし　大高村。　愛知郡星崎なる甲斐の

行宮に祀しも宮所娞を定めしに紀州阿田知何多比
加弥阿称古と云ところにも遷幸ありしにあまこの地を読す
古語とするべし

○正慶六年六月十日託宣記熱田正一位大神云々

○仁明天皇大政官以牒熱田神体大体図造云々此地仏の
像なるべし廣井本光寺にあるに古き大般若の跡あり熱田
にある地ハ源左衛門大般若ハ剣宮奉納の事記より此盃を
用厩司へ手入にてあれ仁明帝の時の写しなるべし

○董仲舒曰天者君羊物之祖也 對賢良策
伏按我国史以天御中主神為万物之祖者尤有味也

○府謂之宝蔵貨賄之處庫ハ謂車馬兵甲之處ヲ 左伝疏

○杢花の時からしれたる三月節としても行ふ事定かならは
菊の頃より夏のはじめ早く夏菊咲出より冬ハ寒菊
まで花の中にたえたるべしされど秋菊のめでたきは和漢の
詩歌にも詠じて秋の花にしたりけし

○熊野新宮毎年九月朔神輿渡御に浜より渡を次の船に
唐見として初児に飾備の衣を着せ紙笠に山鳥の尾を
付し十歳まて其次ハ神人多くのりて略号して出船
を漕出す丹生山に神輿をとゞめし十月十六日に渦流の
え人もぞ唐見をうしろへとはふ

○明人陳元贇謁拜敬公寢陵（寛文二年壬寅冬之）寄跡東國數十
春感ニ公升斗活宛爾鮮錢手心剛膽無自今日至宮拜
有尚驥困ニ監車講ニ伯楽ニ龍理ニ神淵ニ辨豊城ニ自顏ニ一
滴府知涙銘德千秋永不諼自注ニ云城音由古韻通用
唐李適詩化工妝點ト洛陽春柳如絲飛花散滿城
元禄八年乙亥の暁月但刺君叙爵の御よろこひによさる
ゝ御幣使よ　寢陵にまいり侍りし古松　によそへ
志つりよ晴れ去の氷かとけ解きを新蕾春を浩ふいと清く
りよめてたし誠よけ山の盃よ尾張ニ神社清りまき
右尾張山といふまや光友郷のまゝ由ゆかれしそ
宴よ靈觀を神の淸つるへきし逢今ト申し昔成物
の如よ豊今を再生の遠近よ宴まひ天武の御代に
至藍連翹（サヒク）勤於守としめふかう代々勤仕の手助ト
向せられし又小野宮の攝政実頼を尾張侯より
封し清慎公と謚られし添よ敬へ御遊て封謚を稱し
まる

○昔我日本太政大臣而執政之臣多有封謚
史（フヒト）淡海文忠公　良房 美濃 忠仁公　基經 越前 昭宣公　忠平 信濃 貞信公
実頼 尾張 清慎公　伊尹 三河 謙德公　兼通 遠江 忠義公　頼忠 駿河 廉義公
為光 相模 恒德公　公季 甲斐 仁義公　此外謚号をのふ名臣指

爲し中世より落居に入諡封のなかりし寺院の号を称せ
るハ东三條摂政兼家に始まり法興院と号し

○后宮門院号ハ後一條院の母后彰子を上東門院と号し
より起れるよし号より先皇太后詮子を落飾の後東
三條院と号せしる始なり

○神皇正統記に云上古ハ勲功あれハとて文位に進むことな
かりき後の文位の上に勲位といふ品を立一等より十二等
迄あり文位に合せけれ勲功ありて一等にいたられハ正三位の下
従三位の上に列しとぞ見ゆ又文武位ある人も武職兼たるもありけり
しと云々

授るに文位令第一の義解につまびらかなり文武位に
帝道の樞機天下の權衡なる人を選て授けらるべき
事なるに末世に至りて文位常なり近職猥りなり人分
ゑらぶることもなし只時の君都にみだれ權臣のよに庶
伝ふに右に挙る所のそしりを止るなかし勲位ハ唐
の制にならひたるにや家勢文位のみだりがはしくなりしハ
鎌倉将軍家の時よりも斯はやし君とも文位あり
免さしより起り伝ふるにや應仁文明の后に公家衰へ
さるの方諸国の武士等其下にあるまで堂上の家に
従ひ入口宣を申下し名乗ることぞ文武后ハみだりからくなれ

さて八日宣下あつて同ら集の守集の右筆なとかかりふさ文
ニ名のり侍りき　神吾統の後ミ人か事ともとめけるも
のふかとめおほされハ其後ハ絵讃なと文名を存
世の絵かりけりきわを忘れ侍ける事なれ
是非浅文に任て但心多人ハ王れに妄人侍らんや
○文府宣ハ指政より出さるゝ文書庵宣ハおほともいふ検非
違使の别当のの文事之勅文諸家のをかゝ人々に奏する文
類状ハ諸臣望む事ありて奏せし所なるを
○上階ハ位階か級階位の事也
○唐大宗文武皇帝貞観元年春正月宴ニ郡臣上君臣

宴奏秦王破陣楽云云　綱目
謹按ルニ破陣楽ハ大宗秦王たりし時劉武周を破りし
時しに軍中に此曲を作りしとて楽人百二十八人ヲ
定めて武の舞とぞ後ハ功破陣楽と名つく
貞観七年又更めて七徳の舞と名つく是乃傳に備
武有七徳と云へ是戦舞侍人て代々奏せし一織
朝の皇帝破陣楽是之大曲忠ニ伝絶たるや
今道開の教ニ破陣楽ハ六人の舞なり我誠公弼廷
の楽家あり儀し給人残して教曲をなしめるにふ公義
上に浚教ニ破陣楽の舞なとし物の音ニ今ハ出る

法をおもひしこゝろさしありて佛に無縁の御志をたて
るゝ礼楽に例復なし四百年をへてもなし世に
有事なるへき事にしまかいまたなき事也

○陽病則陰勝故馬疾則臥陰病則陽勝故牛疾則
立
造化権輿にあたり伝俗馬ハ
立ふしてよく牛ハ臥ふしてふハ是乃

○金翅鳥出二鶉子正法念経抹レ之為レ説

○石燕相中記云形似蚌小実石也

○三足烏瑞応図云王者慈孝天地則至ル之云

○正鵠の正ハ鳩鳥の名なるより潘確類書一百六

○鸚鵡螺出南州異物志

○人面獣 出阮籍獼猴賦

○伊勢両宮造替の材木近世ハ紀伊国大杉山まてとり伐し
元禄庚辰秋今の始りしより材木とかしこまりて今茲ハ
信濃ハ木曽山まて良材を求め給ふ時も国郡の希なり

○書院玄関のかまへ我朝古へハあらじ実町公方家の時より
の僧禅院寺院玄関を立将君帰して柳営よりつくられ
しより今すしも武家のうちへとりたり 寺院より出し仏法の余によりて異邦儒学者の所評之

又床に観音達三布袋なとの絵をかけ中央の卓に香花を
立るも禅林の風俗也けり

今禅刹毎年の始に客殿の一間を掃ひ観音の像をかけ

中央の卑に香花を埴へ。家の始事を行ひて知
るべし。出山の秋迎は此道者の事にて僧家にす
識作り

○椀飯 東鑑に多くみえ源氏御代より此の巻にみえた

久しき云事なりけり

○神代巻踏堅庭 かたにはをふむ と訓せり 源氏の御多の巻にみえたる
さいたまはあそびやことを求めて搗きましへかき
土を踏みてと訓せしなり 堅盤をかきはと訓せしは
庭の事かなふかまへや若に以蹴是撒とかれ...るきい
をはる名なとの様はけちほしのふといきをへをいふると

○諸らけんるして訓を受業之相当の心

○我生古へ学生入学の時文章序寛堂名儒其字既下

○先公薨後近臣奉謚号及其家或問可奉祀乎予曰
謹案無君奉臣家之礼上昔漢元帝之時玄成等奏曰春
秋之義父不祭於支庶之宅君不祭於臣僕之家於此
知吾君主不可奉於臣僕之家今浮屠氏漫奉高貴
之主為仏事者是貪礼施也嗚呼君在臨於臣之宅則
数日以前洒掃内外而謹恭甚厳吾今君薨後奉之於
其主者似忠厚而其実戻礼瀆神耳況祀祀之無敬
戒致誠置君位於我常居之側而無嫌近之不思甚矣又宜思之

○我国修験道といへる一種の異端あり唐の方士のたぐひにて役
国よりて家をたて役優婆塞を始祖と仰ぎ今東山
南山の両流あり南山は修験をもて中興の祖とす初両流ある
といへども当山は八年より修験者の取り来りて我派を定め
文八年争論の頃より東山の方主をも熊野三山検校と
号せ勅許の号に良瑜僧正代々の頭分となりて三山を補せ
られしけ
つ且ひて思ひしよりもみな百の?の事にて身にかゝりめ
されは熊野御幸の時役を先達しつとめし役行者熊野
より今宮は源出して今峯より熊野へ出ることとす数十度
なりしかはなほ其流を先達として?もてなし源出か
峯をも順逆の峯といふより東山方よりは入り南山は出とす
との?し修験宗寛平七年に峯中蛇なり毒蛇をかえ?東南陀
然るに東山方の?毒蛇をかたちて
ての事とい入り
○唐太宗不欲赦范氏習善政 唐鑑
良民の君の法を犯まして罪人の首となり是又姦
の意より起れるかな根苗を中ちおちて穀を害する
事也実と見るべし
○屠児は牛馬の肉を屠て?けるかしき故穢多と

事といふ是附会と覚ゆ倭名にはたゞにはとりと訓を順
和名抄に取らざる解釈一也とはたゞにはとりの猪殺之逓を
略せん

○寄居子がうなとよむ和名抄にかさなと云へりかみなは蟹蜷
なり其のかたち蟹に似て殻は蜷のごとしゆへやがうなは
猪諸のこ換るに似たなは殻なし他の空殻をかりて寄居
ゆへ名とするよし序の文にあり常海辺にて見る事なし
さし其の殻をも取れて移る時は殻ぬけたる二さひ
売に入りなし古人物を見くらべつき話とかずふざるなり
多し鰕や蛤にて對なしといへるもつらさし栄螺の扁

なりあるて蓋なしと云ハ寸之又相思子も海捉餘原に螺
のしゝ無して中実し右にあまとにへる不詳相思子の
醋を得て盤旋するは小ミ瓢の蓋之崔禹錫ヵ食経に白
玉の蓋にしへるより和唐にの乞伝られ之はしなの字
たしたるなはその合ひて八中実七ヵ貝之とそ以ふ人ぞ書名
に知りたし那の類のほかいのされは大中し得ぞすのはかなうに

○新撰万葉　女信芝とはかるは一の事也

○今朝庭猿舞　正月初り民の小も厩の祈祷と云ふ
年の始先猿を舞しむ

○易曰道篇ト執鑿　読易曰三折三戒　論語讖曰章扁三絶錕　撝三折漆書三戒

素王之功(梅福疏) 読書眼曰月眼山谷公言曰誦言(書三職)
盡言曰索言(許后傳) 違道之辨曰詭辨(石顯傳) 夫言曰
堅言(漢書一) 和韻之書曰諧語(東方朔為諧語諧) 飛揚誹謗之
語曰飛語(灌夫傳) 一言必信曰忌然諾被謗曰措板口語
(楊惲傳) 此類の言要亜云集にみえ侍りて二三をしるすを

○神武紀曲日字釈日本紀(十七秘訓)ヒシカシニムカフト訓せり按
するに日向ハ狩詔東向ヒカシムカヒの轉ヒウカ也

○利手と成るへしと読ハ倭訓にゆうとまて奈子をかりて訓せり

○今民家行事につきたる樋(俗語ツモ)にすることいふものなり
何の字ぞ日輪轂の字に本朝相撲の說にある細腰鼓のし

といふ樋に付る示のしのかしらに似たり故に此名あり伐

○樋或ハ紡錘といへり

○卜部家唯一と称するものなし法華唯有一乗の文にとれりと
名法要集に後一條院震筆にて唯一の二字成
まめかたといへり俄に林羅山の破手成疑て兼倶の作に
かゝはしとしいへり按するに孝徳紀に常道唯一の語あり

○卜氏是を忘れしなり

○兼倶の神宝圖一巻行法の器をのせて是習合家の器なり

○顕宗紀盟言曰今共歴心血今人是をもって起請血判のはし
とす非也是ハ赤心の謂なるに血成誠と訓せり赤臨に起請

血判のことあり指より流血をもて起請の先とせり今指血哉
花押に點せし其指をさしてせし史記陳餘傳ニ張敖齧ニ其
指出血按索隱是表至誠為約誓云也とこれに據り但佛
書以血為墨のことあり

○尾張一宮祠殿有大龍姫龍二神按するに三元大傳
神妙経 習合家所作 汝大彦龍王者伊弉諾尊変作又汝
大姫龍王者伊弉冊尊変作又云々是佛者龍王の妄
説に迷ひ我神明に混ず哀哉

○蛭児舊事紀云水蛭児日本紀若水字
按するにいふこの源氏物語にいふのことに見り蚕の虫を
既て蝶のごとく化したるをいふと云云蛭の字ハ蚕之今田
舎にも蛹蚕をさして家蚕をひびきといへる時もの類に
の古川に流すとあるは蛭児を葦船にのせまいらせて流す
といふも往古の俗説にして子の数に入たまはざりしことを
あやまりて神代の説には上古の妙俗説多くあるなり
今其を忘れ俚説とするもハ作者のあやまちなりけり

○正月かざりの内ゆづり葉ハ何の用ありてかざるといふ人あり
按するに三角柏に似たりかのめでたきものや大嘗会にも
所見たり又解祭にもあるを梅花も用ひて十一月晦日
古の人の食物をもりしこと又ハ其の枕にも用ひて

○以大和其実為二山外一今生駒山外也以神武紀考然矣
但此山者蓋𠮷（イカルガノ）峯之饒速日尊初降二𠮷峯一遂鳥見
白庭山ニ喚云虚空見日本速日尊所名也言満天山前
也万葉天亦満倭 是十一地廣平意也𠮷山前面而今大和也
日本学以三義訓書之也

○神宮雑例集曰大神宮四至東南西深山無有人宅此
限宇治川者其程去宮一里餘此内不住人宅禁制尤
厳此則為禦穢事也 今ハ宇治川の内子良との数迎ミ所せき家居まりて古制よりも遠く侍るめりし
人のゆきゝし多きを神路山の□と思ひつゞるかし

○大嘗會次第八省観儀式延喜式江次第康富記等ニ
詳なり其始天武天皇即位二年有卜定之斎忌則尾
張国山田郡次丹波国訶沙郡並食（タラハミ）卜云 日本紀

○五節舞其始不見日本紀 政事要略二十 年中行事二十七 謂之詳又本朝
月令の説も是に同し

○三社託宣 天照太神の託といふハ厩戸皇子の語を
よれり聖徳太子御託文なりといへど或曰卜部兼豊之作也松
下見林曰宜風記をみれハ三社の託をよめる人の哉
志なされける兼倶と外縁なりければ兼倶作託を偽れりと
いへるなりといへり

手痩
十七元兎手
作り右不除

○今俗疫病流行の時蒜を戸にかけ侍るハいかなるまじ

○なしみやしと定人を賞歎のまに〳〵事のみ度々伝へしを
我旧記よハ古事記よ日本武尊足柄山の坂本にして
食御粮者ゆまふ時山神化白鹿振邪し蒜をもて撲殺
給ふなるを記せり是山蒜の瘴邪を除の由とぞ
かくるこし伝へて除夜のまほかし侍るなるべし
以上ハ備忘雑畧より見之たり

塩尻巻第三十九終

塩尻巻第四十

日迅

○観随師東より上りきて唱導せられしかとよ今ま
いりて結縁す一日の東西三十年浮草相伽ふ亦因縁な
於伽や我月中の八日ハ大谷の宮ひれ忌なりしハ一年ハ
僚字を奉て三家営に入れし
某夜主寿鏈光院二品大王
関花行啓のむかし恩顧を蒙し浄土大会の良徳輝
を承しめしりも禅夜の夢と成りて老の眠猶さめ難て
鳳笙風寒く絶て華頂暁の雨暗く竜墨月ハ孤

のこりて竹園夕の桐長ね嗚呼六面の有月ありて秋を
うつぶし侍りけんとも正當の御月諱をもむかへまゐらせ
いとしもも聖号一百萬遍を唱へ以て仮行願円満還
来渡生の奉為に徒へまいらせ侍りしもゆかりあり 未前聞しれ
かゝる花橘をおりて
我はとかくおもひおもひて年を経て老の枝になれし橘

○家生 昭容の おとこを云 雙の字を年数に用ひし事和名抄にあり

○文字の並ところ異なれとも其意同しきなりけり
旁若無人 史記荊軻傳 晋書列傳
若旁無人 左太沖詠史詩 これは旁を傍に作る同傳若無
人とは作りは事の狼藉なるをいへる也重ハ肩綴なる
好の者なるをいふなり

○輿願金剛地蔵菩薩和記
いまハ蓮華三昧経を以て記せり前天台座主三品法
親王尊助 亀山院ノ三百王子宗尊親王ノ猶子号ニ成就院青蓮院ヲ経シ 九十斗ゆして年
しのふし

○蓮華三昧経 大唐智不空三蔵記や
真言宗相承恵果和尚弘法大師に授られしを啓明
の後室生 和州の堅恵東寺の真雅とに伝授りて醍醐
及仁和寺代々相伝云天台宗相承ハ西園寺前相國其

孫竹園院の禅師の為に三千五百両の金を奥州に
かへりて天台の重経等代りしあらましゝ清涼寺実重
竹林寺の澄憲和尚五臺山修営の為に五百両代
受て蓮華三昧経を渡せり經を良助法親王
母家の為に伊とし什経を迎て秘蔵せしかし由
自記せり

○或人心なしとみゝ有りて歌をなかしまも世の中
のなけきこきを見せさせ給ひてなれは見えへしか
きゝ侍り

楽昌分ニ破鏡一　蘋恵織ニ廻文一
葬水別離恨　方知逐ニ断雲一

かへりし中々のことむかしなくて
なれなれさりし無情中也て冬りとふかき恨たよなし

○詩二首

再遊南野　先既十一年

想昔来遊南海濱　又尋風景感情頻
蒼浪入鬢十年事　主客共疑旧日人

遊南野値雨

曾見晴山似昼眉　再来強續雨音詩
任他西嶺神人袖　好捲煙瀾入酒卮

此二詩ハさいつ比ヵ岩崎老漢と海辺に抱し時老人自吟
し自筆をくれしを蘂なり梅雨のつれゝに綴し庭
又古の中より見出し侍りしそ只其時の心地なんし
侍りて涙のおさへられけるを忍びしく実千年のうちに
またん侍るをも忘れて年月をいつれにか見へ侍りし
さする老人の弟の紋名れにて又消て消のこる命をと
ありし後に便にも思ひまいらせて侍れ猶彼韻に次
今又唱へ侍る

徃昔同陪鳴海濱　豈圖今月断腸頻
旧詩添涙蒼浪水　四七吟残泉下人

又次韻

一斤音嵐楊白質　洒来野雨還催詩
篋中手澤不空朽根　風月何忘眼酔卮

○今年卯月ハ彼翁の大禅忌にて香火の場に
いたり往を夢せし嗚呼哉亦未来髪愁状悝て凝青
煙をへむ思ひもし

○そのうちよりいみしきかさ立ちのぼる雅とすいきぬ細ぬれん

○今茲去より夏に到り疱瘡大に流行しまさき幼き男女
のちきり多くこれに失ぬるをみるもあはれと教ふりとつきもの
九八月十五夜人并田など近江の国より手を以て揚を

折ふしあんじ来師雅波か許にも文有しさまに文入侍り
事へ爲なるゝとて中途にし
風さそふ烟に露と消にけりちるまてそつまての白露
○己卯の冬師中和門院の女嬬茂武の三千三回忌の辰小塔
波書路
浴二八德水一　坐二蒙室蓮一　一笑遊戯
嗚呼伽毎雲井のきやつり人を辞して仔細ありて
侍しきさそふの時にて東海尾府に来り光の後剃髪
桂光院今茶
昌岳寿鶴居　二心なき念仏の外共なりし天和三の夏
閏六月
廿九日　若水を昔終りそつりし念仏して香炉を執
折二刻到補院安養界に唱次の句に應じて息絶
まさのふのこしくなりしかにさも十月年月かしの日殿
之さ知ぬ者しなりのき達意をなうへ長林寺中て造営
の焼絶へ侍る墓下に花折る酒侍りとて
年ふりし昔の下に花は似たる袖の香哉
○可空大義上人ハ予が学友なりし河内西方寺を住持
して年久しくありける時は往来の便りで春
秋を問さし人侍りし今年乙未（正德五之）一封の文使りまゐらせて所
に四月十三日寂しにけしよし書きてその文。　その文に
侍りし不意四稀侍りぬ百ヶ日の忌なりしかバ香をそへ侍る

昔別東園月　今開西刹華

葦書空反几　孤鴈属烟霞

○泰廟十有七回御忌辰（乙未六月八日）のおりから有感一絶を述て

誰知待死一長吁　流水恨新歳月徂

遠蝶夢残仍遠々　悲風何事独愁吾

薨去のあと筆諭参上人含をしてかたちのはなよりかゝる青松
宅を隠せしめ御脚子陛下のあるおりかゝりし羽之（元禄十三）の年晦月
の元日年をたつ女房などまいりて立帰り芸を嫁し
まいらせしもよいさやかなる不諱の支ふる人今何をか
秘すべき事どもは蔵のうちを忘れしとまささらいかなど
せしとうやあまりしもせしまりしてのち六月の末に医業
のあつかふしきことさせたまひしちに柳営の侍医をも
召しまいらせてさまと何かしのあ得家啓せさせたまひしよ
人命限りあるをこふがふかしく医を求むべけんや上より
仰ありしが恭を謝しまいらせて寸之家よりいでうくとは
下しとては公志つかうまへきまでものかは時はとうとりて
大樹も懇思たまはりて医者を命せられて御閑暇なりしみな月の（元禄十三卯年之）
年の別れにて御源姓もむしく雲のくれさせたまひしとや
かくときくに今より後は栖も知れども見へまいらはり
まいらせしかば御月日とかさねて今日十七回の御法会

指つけまゐらせしとぞいひつたへける古人経を蒙りて
国志編集の事ふ貞ま近く此秘閣の形容を写て堂
に安置ありしかともあまたひ暦を随佛に仰て往事
を思へハ南柯夢定にして愁容隠しより知りつれなく
のこり露の身となりてさましかりぬるハ此読経の
牟りに法燈にまいり侍りしか村女のさましくさらく
袖にかゝり侍りしかハ
思ひ出る昔にぬるゝその袖を佛に添へんと老の（村女）
般若前三部甚深妙典ハ二万九千の百十五字三乗教外にして
於て持名の一門を宗とき天下の万機に抑してとをり

蓮華海会に入しめ給ふ嗚呼故君菩提の為かしこく
豫一生補処の名ハ法王子の佳名を得たまひ三身究竟
の摩尼輪の極位に昇りましましなん凡そハ識逃り
還来ましまして无畏解脱の功をうけましますらん世の人の
みることの侍らは有海沉没の巨衆等を済ひ給ひて一佛土の花
台の上にしめ侍らんを名けるしも咒願しまいらせぬ 弥陀経一百部並名号一百万遍
猶云量寿宝王微妙浄華甚臺の讃文を唱へまつりて
かすかに宮の池の花うつりまゐらせ侍りける君のゆかりつゝん

○泥江縣天王寺御霊会の前夜 乙未六月望 祠にまうでゝ燈を見
川の辺に佇みて月に吟す昔日有感一絶と綴りしゆる不憶ひ

出せし詩　元禄乙亥

漸連満月碧芦晩　袖外風輕塵累祛
獨笑人間無暇夏畦　汗珠自露潤二塵昏

或者よろかりん伴ひなれし人も今ハ泉下の客となりて老の
寂寞より遊びよろつろふもつれなしや古き韻を用て今

又自和歌

老天月上江風晩　揺舟露冷世塵虚
二十年前残夢客　白頭水影是誰歟

○或問宮千首に雑惕鬼のまを見へり一書に堆惕鬼に書せるを
見る所しさや若止觀に鬼の祭相を明さるゝ中三種あり

一者堆惕鬼　二者時鬼　三者魔羅鬼

其祭相各不同なることを見へり　堆或堆ともに（手セリ）又按るに惕（他歴切）
惕（ア羊切　ヤマヒ）
此字互に用ひて字義異之但しやとへ（やとヒ）其言近し

○真言法門不知教相者三代相傳則成常見外道なれ勝
倶舎毘曇運傳都の言也而如傳正曰生じへ教言を守り
言深意をゆされ有相に執し表徳。悉く文常なるに同じと
云く密教の中ニ此深く諸法の不生を了達して大空無相
の法に於て表徳をて論なん是豈末世淺丈のものゝ能せんや今
無学のもの言師なへ般若等をミるに雑る不生無相の理ある

達せりや大りし常人の仏道ありかゝ祈祷せり七深世し終りの
こ邪三門の邪流俗風の仏法を以て人を惑す者一二あらんや
とそ見ゆ
○今年の春比ある邪輝せん人を欲せまて邪を解て去じハ陶潜か
操は盗陽をいく青をうけまて角巾して七里より入りしハ羊
祐か智ありか体体亭ハ文を量り分を揚し庵を知りうく
隠れし文ばありしまた老らく貧りふを忘れ丈を衒ひて
倫休まさそを不知ハなお患之りり白髪きつゝあらて名利揚
辺りよ老若雅の道忘れりとせん或人世のうれていとくきつづりく
文合りしを弔ひて

故園風物好　孤鶴尚群。
枝頭高掛月　活歌一片雲

○志ろさしそそむべきものを忘ろきのあとさらさあり智る
らんとしぶ古歌してかつれ二百年の素業親女の友となり
半世の窮分餝顯の根を酒まで老の坂越行を忘れ顔の
霜白きにも離るゝにハ世諸古今文集しらおや
○或人の言出て懐旧のうるよまゆ
嫌しさハ清すこそいかゞめいでうくうさ昔をまた忘れはなん
○今歳乙未（正徳五）三月勢州暴風雨（五日）今月花洛の逃雨（大風雨なり。焼人死ぬる者）
後六月殺州暴（大風）風雨昌木家路洪水十余ヶ須東流家舎三千余戸漂流男女多く溺死と云

東都の地震十九日より始まりのこきをなら七月朔日府下雷え
けしく鳴りとゝめき数ヶ所へ落し人死傷く怪我おびたゞし 十條村百姓家雷落る
しきのみならず霹靂市井を驚かす此の地を落しより文なりむる
ことなかりし

○米穀日々に高く初秋の比新麦金一両にて四斗二三升余を
買ふ下民の困窮いふばかりなし

○両国納涼の舟も少なしと云 六月六日の大雨両国の小屋を流す 世の窮成人
のなき事なるべき故ませて舟も納涼なからけるちよ
していつもよりは賑も去るなん我尾州津島の市も人なく
剰へ十九日の洪水にて大にあれはてゝ止ぬべし

○諸人の気宇見るに日ごとにかはりゆき毎日を造るがごとし傷れバ人々
府下の老賤男女病死の数見ゆるのみならず人百を以てかぞふ
ましく二十日のころまでとはこそ多かるなんかしや浮世の
有るかなしすくなしとて無常離の名を知らずして傷る
中にいふ人多く実に世の花やかに春へ時めく境に在す
かれぬ人いつの世をいとふ思ふやハ何かもきてこそ尚これから
へき心。かゝる時も世をつゝしみて傷むべし
傷ましき思ひをこゝに世の中かゝるまじき時を嫌ふべき

○文月初天河数の清冷をさへ久し梶の葉もより手て夜をも
わざなし婦女の盛りをして化ハ上雲の里を思くして趣ひ傷ハ

悟なきまわしもやかど格法の儒士へいふ吉田含黄氏
静なる雨を掩て東門于夕観音跡佛を拝志したる人
ある一年の井上まで旅と悟まらえへの山路かへし夕立へそり
絶さひし秋の初風吹と啼しらいとくさしうかれのりふ
を思ひすてさとびおもふ友のうへこより思ひ夕の詩一篇を
贈り侍るの情なりしかの師和し侍る

微涼簸秋雨　断雲漏月新
荷風清老気　蘭室息吟身
藜杖可閑适　松琴識有陣
星橋惟一夕　玉露補天恨

楊葉もおちて彼り迄階に侍るとてよみつけし
なるとしれ志れ旋の影にかくるとのさかし忘れて主ぞ秋や。。。

○禅宗本寺住職の綸旨は八宗の和尚と成り浄土宗の僧を
和尚と呼ハ禅家に於て称するかと云人多く掛まるに浄土宗も
古へハ和尚号を宣下有りしと見及ぶもの也　康富記 文安元年八月十八日
浄土宗ハ観存し被聴ニ和尚号ヲ宣下之事 悟真寺坊主て
被存知にて且浄土家の僧ニ論号を編し多くハ和尚号之
悟真寺開祖ハ恵上人ハ廣
然和尚の勅謚なりとし　故今和尚と呼を称せりと也

○七月十日観音参詣する寺院へ千日参と称して男女多
参詣する事とかハ此ありの千日に
なりそれとのふや　とふ洛東清水寺九日の夜より始まりし

さりながら辞職せり元禄の頃よりも既に百年前の事よ
さ又なきさる人何ありのりと云かして如く諸宗門しく皆さしなんへ
素唐ともあやしみ小人に京師の俗有月ありか千日迄盛
矣の逆盧をつらとて六道 六条の 小にち まゐ事いおし下りきり
六道珍皇寺に云ふ昔諸人今七月七日より十三日まで詣ず今は七月十日朝参ト
云く 親長記長享三年七月十二日条六道云云六道より清
水寺へ參ず下は頼遠りト日蓮諸人今もの乃千日迄逆盧つき
槇衆ひ成りて貴賤く清水寺元もの日とひ下りし
又素唐もと離しくいむりし六道よりしり清水まゐでし
を逃結縁 月への素唐日成日よ 申しえし又之世のことり

○六道古の愛宕寺のありさま薬師を安置せし所を傳ふ所
なりし愛宕寺とて盂蘭會をなし事今は昔の物語となれ
りたり

○相月濃辰は萱親三回の忌なりしかは宿志を澄心清魂の盃に
無ちり蔵中して三星字盛清像の供力とそ定して修り往事
夢となりて流年秋到る矣祭祀は丈なりぬ秋を露けく
何となき哀れ見ぬは 死しまして除難やかる除所の
靄を延ぐ名残なき三年の今ことしゆくりなし

清夜重雪月　春風幾歳秋

と云一聯を手にして祠堂にかけ供へし又たま祭るとて經を二

うきこてう洒ぬ

寒林露白　夢回塚庭静

桐寺風清　眼霽秋月高

市井歌唱新よのきの桃やしゝ盂蘭勝會のけしき

いとしきしうこの秋を悲うれおすへ聲る洞の戸よあれく

傍らや或人のおもふ十五の夜萩の葉よ寄て

かざの葉にまよふそられて君よ乃か粧ハおちぬ秋の白露

しかさしも詠られまて

萩の葉のかよふれしき心なき袖ゆも散る露の白玉

かされとも春よそ秋ぞうきてそへ侍りし

○去比四月　神廟百年の靈祭の時　法皇の御所said

御よそへらく日光山へまいらせられし時しもあれハ冥しる仰られ法の花咸百年まうでこそハ見ゆ

○元弘元年後醍醐帝笠置へ入御の時供奉せし大河原た

島つ尉有重ハ信濃国住人数の人足助次郎重能ハ三河の

人之民族多し

○丸鶴鸛[クワン]白鷺の跡足高き鳥ハ不交して雎鳩(?)蛙ハ陰

なりして交尾蚕ハ食して不飲蟬ハ飲へて不食陰鳥ハ

雌雄陰陽して鳥ハ陽獣を侮る蝶ハ諸花の蕊を嘗

めとも蓮花を外れて猫ハ諸虫を食へとし蟾蜍を除りく

その内女の其之蝶ハ花こしゆゑへうるる虫尾更尾て其首
それをきさへ下花切と蜻蛉ハ羽を平く蝶の如く束ねらく
花るなバをなきもるん爲ハ雄尾を雌頭ならけて同し方に
花も化切然といふ月と蔵ハ人知らハ雌頭頭にあるら曰
細よりんれバ雄虫来つて其川雌虫の頂よ尾頭を与へ附
雌虫尾をまけて雄虫の後すよ附して更ら雌尾を伸て後
絶て翔るそのまゝなれざるハ欲いまだとゞまざるなりなる遊よ至て
殺尾は曲る後以て知るべきなるし

○北畠信雅 これハ信意と云 父の口ひとの後家となりして肯ふと似ざり
これ其豊臣家の恩顧なりしあつて静にくらされりたるところ
うましくさのかりしや人の思ひかんうきことをうき共
なげられぬ身ハしと聊やかれしとや 臣井氏幻従

○信雅の墓ハ京師店山寺にあるる照院殿と号し
北后親房十世の孫也

○琉球ゆりり出るものにまた真眼紙かりろさしの折紙
のめくよくして又表ゆうさる紙よ似たり墨厚かして
色白しつやゝかなる紙也 其国南方の産を得ハ ヽ
界所入りし花所風を出しまて出制の器となす さ夫を
靡さしきなるべし

○倍り之頭の早便と云擁せるよ雉鹿便に辟き如人

○畏时御入得其段しらへる是之元人事物よ恐畏せる时
精神よ怯弱なり故よ凶鬼其便を得き是を悩まを
なふ
○駿河の今川治部大輔義忠卒後義忠いとけなかり
しかハ駿遠二の士ちりくよなりて諸家の威氏へ趣
すりまま尾州の斯波家へ属しもあり又自ら党
を立しものもありしかど三河国額田郡よて大将軍
なる尾山中勢へ入れ築田左京亮なといふもの一揆中
时京師将軍家松平信光子を今川に属せしむ故に今川
死にしかり此时松平の小勢よ十日留守とらふ今十日ハ

今の平田なるべし
○西京正法山妙心禅寺もの院者籍田の後にして後
引出に擬して宮殿を建て此花園を添ゆる時の人
花園の離宮と称せり延長中国禄せり白河院の
御宇園を以有仁公に賜ふ仍て他殿を囲て燕居せり
安よ是を花園の亭といふ花園左大臣後山園圃寺樹名花
勇殺一の壮観なりしが一旦兵火に亡し舊有となれり
延文帝時此に離宮を営しめむし右花園出而と
いふ花園院吉野の先帝の時上皇花園帝御園を捨て関
君とし関山和尚を以開山第一祖としめふ上皇ハ萩原よ移りおハ右或ハ

萩原の院ともいふ跡に寺あり後土御門院を始めとして仙洞よりも大宮家
弘乱を発せし時寺産没せらる明応の時節にある死去へたり応仁元年
の大乱に騒動となれり連歌師宗牧宗長なりの時
而こゝにて作せし句を集し一巻をば萩因勝坊にて
霜かれやおなじ垣ねの萩の声　と云発句せし其
外多くの勝坊を見しハいときたなき所なりし也今小倉
のしゝ之又律僧の住して　神松の寺の名寄帰り
也階小はの時も荒蕪の体なりしと云へり

○我国の学者文学小ちよしはた学者の作也設章ハ
字をとりたるへしかのに無きやたとへば峯嶺のぬきさ云
とかハ三○し訓ぜられば平の時ハいつも嶺の字仄
の外なれば嶺の字を用ゆることなし物じて言れ
考へ見るにやゝ与みハ嶺の字則ハ嶺峯横見列ハ
高嶺など唐人の言葉を以着よ元化岸数石
用しものを詩作のこたりし限土地を本んに事
たるによりて其の説ともかるしよく考へまて
言事なしや或人の為によりたり略写せ

崖
坂
磴
間道
岬
棧道
渓

峯
嶺
嶽
谷
嶺
林
麓
畑
巖
岸
渚

○鶴ハ白鶴なり玄鶴なり九十種ありも作りなき中
に鶴鶴ハまなつるゝ鶴ハ鶬文のつるとや志りるにされハ
鶴之種五て羽翼各ある之丹頂白身ありて頸翅黒色なり
ものを消しゝの鶴といふもやそ他ハなるよふま有之
鶴ハ本草こ血の能ありて肉の美味なりし今の膚等
との知所りをの能ありふしそうとこそひらとれ且
れ其今こ鶴の中よいわれとさしてそ同じもとの
葉なりと云ふハ頗乱の事ある家なんの古きに屏風の
中よ鶴あまた画作りをなろる母にあたりる
又もし作こハ果をもちてよ画作りはかりにとるなるを作りの也

実も鶴ハ陽鳥ふして陰よ遊ぶ今ハ探るよ史ハ精り
云ふなりに依て自ら能なる体を
を尚ふかりがゆへよ多ハ色白し声天よ
聞ゆ左る頸赤なりし云々
り且鶴経よ見之ハ赤碧様よ
云蒙編衣なりといふて
なる画く白鶴のこ
つるかハいふも千年
の齢を保ち万里の心ありて
風塵の塵に操なり風會

弘通して称して
同かな例として
侍り

○或人云今の俗言分の夜掃豆を撒して税すとぞ
是追儺より起りし中華の詩にもとりて見文とふ
京人侍りて云洛外御泥池の良隅に豆塚とて小さき
伝へて云寛平の比附京師に疫病流行せしに神託ありて
新城に出宮の神を祀りし除疫し来人神異
を畏て此地を高く盛りて豆を埋めて此方に
撒し餘豆及び殊を市中に埋として此を豆塚と
唱へし是疫を追ふ祝すとぞされバ節分をとうち侍
ハ寛平比起り京師より始り諸州に広まりしなりやと云
はすれども能界をがよしなえへざれバふかしあやし鳳凰ふ
まりてこの文放実すよるべきにもあらずして侍りまさぬ也

○維摩經に無垢稱經と國中異譯之
○世界 辻流を世と云 方位を界と云

○異邦ハ道教盛ニして荘観多く道士あまたありける術
もとより多陽之清淨ノ説煉丹ノ説符籙ノ説經典科
經ノ説左馬䮕臨ノ經籍攷ニ見ゆ（道家ノ第一祖道元大師是漢ノ張道陵なり）
叢銀錢挿ものに道家ニ南宗北宗のわかちあり
東華少陽君　鍾離權　呂嵒南宋人　劉海蟾
操張紫陽伯端　石加華玄泰　薛紫賢道光陳
泥丸楠　白海瓊王蟾　彭鶴林耜　王重陽嘉
馬瑞陽鈺　譚長真處端（王重陽之教日金直）　妻孫不二道書の
多佛經なり　笑し（但し是を教名なりて実ハ是を手本としてぞ）
洞真部二百二十巻　洞元部一千一十三巻

洞神部一百七十二巻　太直部一千九百七巻
大平部一百九十二巻　大清部五百七十六巻
正一位三百七十巻
凡四千三百九十五巻
されば是を合せて宝文統録と呼しとて宋ノ張君房
ハ集むる所道書九千五百六十五巻を修録して六千三
百八十七巻とすなりしところ張君房これ精要を摭て雲笈
七籤一百二十巻となせしとや胡應麟ノ玉壷遐覧ニ見え
たり
○菊地次郎武士（肥後）出家の後本国ニ西ヶ尾北の橋となえて

ともある「袖ぬれし花もむかしを忘れずハ我墨染を裏
打よりかへよ　法名ハ祖禅（大智禅師嗣法）僧へりぶ武士たりし時大
智に謁せしに禅師曰足下ハ短命の相あり出家せハ寿を
保んと武士胤叙父の武光に所領を譲り出家となりし
とかや

○太閤平壌記に秀吉公のことを[illegible]古登ましハクハヒハゲ
ノの[illegible]信長公の御子信雄を伊勢殿と云ハ手やセと
の訛りかしらず侍る多し

○去冬（正徳元年）辛卯朝鮮へ聘し信使の御来聘の時大学頭信
篤曰懌の字ハ[illegible]や彼使節[illegible]主の名なれハ字
しや雅ならぬと異して信使見て曰懌ハ已が国七世の先
王の諱なれバ改さセらるべきのよし請セしに曰懌ハ[illegible]
此の人なや吾曰皇明通紀十一世宗嘉靖元年條下に朝
鮮ハ王李懌奏云家[illegible]大永元年甲申に[illegible]なり然ハ
百二三七十年なめのちに[illegible]

○正親町一位家（公通）近衛前摂政（大政大臣家熈公）の御方へまいらせま
らして御庭に[illegible]（一位家雉飼ひなふ）竹の子[illegible]
かりし描セめのしハとよめて御機嫌[illegible]
[illegible]
[illegible]

従一位前権大納言公通

世ハ志らりば久しやまでかなしき山竹の子のうハ

○神無月より都々ぬる丈の梅ハいまだつらくて蕾を旅べき土なし
り雅道り成りしそて人の古まを借りしめつしき八さり
しにくかりる時ににえ花つまかまりて興ある事ハ作り名似

花ハ初めに万人開花のはれ日かよりんかこそいささかし
咲んかるなしまだ九月を蕾ぬ花よ見さるハ老ち見ある
灯りきし心深そさらかされハ花ハまつあるぞの心つかしよ
花の四季をそれかかハぬかしたしかしそ情かれ秋冬
のつまれ花咲かりぬや八朔ハ後葉ありて花又ハ見えず
かくこそはれ時よささ有まて又をらはさかし奥心也

若の初波しく又をしくも寒れくハ人か

○網ハ魚家がれど其群をなしまた附られを引つさまる
長しきて大網罷長廿二百尋許十尋廣廿丈十余尋尾張上の浦の貫数百金之たそまくありかる十余尋脇網
制まかりうかるかれ凡一網をいて数艘の舟としの海中ゟ罪
施すよ漁人今ハ七十人舟目船を回し漸よ已線張ゟて網に
之準一漁者の村君とが人を号す書ゟ倉ゆき舟中よの立に或は
ありけ呈張のべ指との容を示し諸漁これを見てぞ指揮
よ随ふ中此甲斐郡田家の軍士萩原孝源けふ為を見て是を守一軍中の指揮とハやしと云 叔漁をしあつて網
をかけ網を敵て大船よのつし入村民七八十人つて是をおろ
うぶするきしまさ下は一日の中乗三よ及ゆうまきしぞ

○寺院山門を三解脱門と称す略して三門と云羅湖野録
に所空無相無作の義なりと見えたり

○続古今集に尾張鳴海寺の歌あり 光俊朝臣 今のかたちの
しかるに昔の駅は成海神社の東に立り寺は古駅の西に
ありしと云伝へたり

○往昔民の貢ものは稲をもて数とし中世は何所と云て米穀
をもはらとし鎌倉将軍家の時は銭何貫と除くとなし
後には銭貫と云しかといふ故に後の編録に
に其之是利家の時又一変し鐡国我等の中に立る
と成に他に異なり武士に禄を与ふるも貫高の米穀を

石依唯南は何を界とし北は其北東西は其所を限りな
るとの記録を定めかねしといへとも弟を編したる
所其の人々の知し所は嫌とよむ是は頼朝公以来の御内にして
今出家の武人と云事鎌倉の字を手名にも用ゆ羽柴家
は又各かはし換嘉を考られ給ふ宮田秀吉尾張にて生れ
たまひし時藤を与へられし上田下田を相合せ知行せしめ
られしより左に其の論議のありしが儒者の中に不和の説あり
又家中の相秀吉は生得利欲の心厚かりし故換益に溺
れ法を私するにはあらねども是を左に志しけるなり
且つ秀吉と心よからさりし秀吉は大欲の漢なりし云々

新に備る際上下の田をつき合て取として割〈地頭にて直にし〉
与ふ事なりしは大かたは秀頼の為也し其後に絶たる法なりけり
行はれしとぞ

○我関分銭古来しの法近き代まで伝へて不同之永楽銭を以て
法とせしかし応永中より初る〈永楽ハ我応永に当る〉応永十年〈ハ永楽元年にあたる〉明船
にて銭をつみ来り其より慶長まで二百余年永楽銭の通
用をきらひし他銭〈ビタ〉ト云ふを銭は悪銭とて永楽両銭の撰
ひ民家にて止まるにより天文十九年相州の北条家令を下し
永楽の外不可用と関八州皆是に習ひしかは他銭は止る
への通りしに関東の諸は往ひしに豊臣家の時又永楽と他銭
と交りかよひて他銭にて京銭永楽一銭の直とせしかハ悪
の撰はやまさりけりて民困しけれは慶長十一年〈八月〉止けり
我関東東猶も今迄ある永楽銭を用ゆる事を禁ぜられて
民の弊ハ止りまま我国銭を讃て行はれし其後慶長通宝是
其後寛永三年より寛永銭を行はれ今に通用せり

○天文以前は東国の武士風俗鎌倉ハ柳営の余風を伝へ質朴
にして歯牙を染し〈当時今武首実検の時なとくろもし首を上へ行へし〉又けつりさとて
次にて常に髭を作り前髪をぬきかうりし髪毛を一味
子黄ヌりてりさめ髪末をも細に結のことくにゆひ〈或ハ分ちとしてあり〉
髪末の如く作りかみとめて龍角さの根元しし家業にも常に襖をのけ忍りけんとて忍るを

うしろへりにつけし小袖をとり出して名付て背のへんゆる
袖をつくりものけてきるをよりしとて襟纓ハ古きさまにて
はへかんそてうしろ纓の有女房は子にあやまりし又長柄力（柄目のささましき）
（つらぬかとよやしくぞ）柄ありしてうすし貴女人其さすかに許れ

○女あや共其長の流るる世文字跡なとりけるはなやうしる
婆ろうく今のうすく是れハいとはなりし九元和寛永比年
浅猿て諸士も商人も肩つき之腹の却家も有しに致しも
変りて似もつかぬ当風にして时花婆も数十年まてみ
まし若しも今の百年のちはきこしくありしさるらん
ひろくぞし

上下の事ハこのころめづらしからず小田原北条家諸士の古法
を聞ても今のことく常にもちひしとぞ武家の肩衣の事ハ信長か
始めとされども今のかたちとはちかふりしや但し上下の
事ハえりたるのるけあや知らるし又味噌女（なかかう）を以て今男
女ともに老若ともにちかきも見もんせ中也見すてふ事あり
此りハ三州其外の者ひろんちつかふいまハ京師雅
波亦都ハまして市中の都会の人ハ田舎のまてまて
婦人見る目ハはとしるるも是も又一时の妖菜と
いふべきみや

○正月十四日清涼殿の前庭にて青竹を焼（古事をなれりしく焼）十八日竹を

飾（摺扇等を結付たり）黒川師大美松丈（二人前姿 二人堀姿）鬼假面を被赤
毛を蒙り二疋を鞁を携へ六角返しの年て其之童五人余赤毛
を蒙り假面し腰鼓を帯て文儀より夜宅ゟ男女人
取立て囃之止乎止也頃にとて云ふ是ハ大内家の時神泉苑
ゟして氏宵の錦枝を焼倭人法然義池と囃せしとぞ
猿飛（猿楽）なりしを三元（サキ）溜を手さし呉部上元の燃灯に立年候
左義長とするハ乃士秋氏の試法左義長に成事を習
ひしハ名明云の倍説之

○七月七日牽牛織女二星の向ひ和漢共に舊たり俗に初秋
夜まで天の中よ在る者ハ河鼓（三星）織女（三星）也して牽牛の
六星よりは乃左なり牛宿の度十二種の星の中ノ内河鼓
何より揺り出る牽牛と云しとぞ河鼓星ハ軍鼓陣鉞
役司り関梁の儀難を振くの徳あり織女（一名須女星 一名厳女星）八果
蓏絲綿室玉及女功をさしく掌る二星を丈婦として
祭り者不可なり

○近年神乃者流が云ふ法よ牽牛織女の河合ハ我邦の
故事にて種々の俗説を述る文一笑すべし按ずるに日本
大成経（協手小して出歌の禁あり）日孝霊天皇七十六年五月倭迹日襲姫
命無文而妊孕遂生奇兜胞衣不破如玉中ニ有男子清通
欲破胞而不破其夜升天成星今在銀河ハ衣星是也ト云

光年ゟ蛮舟を召まりし而是の遺言之神風流七夕
祭のお楼まて呵く
○後奈良院天文九年庚子以巴个亜国の蛮客我肥前
国に来る自是邪利新当邪九国に弘る後陽成院文
禄中大閤秀吉其人民を欺惑するを悪て彼宗者伴天連
宗人吉利支丹以為満宗二十余人刑せらる京師大坂を廻して長崎にて磔に処す寛永
十四年丁丑肥前嶋原の賊徒乱を起こし戊寅二月城を攻
滅して誅しぬ慶安明暦の比寛文の始まで於余類
行まて諸国を捜索し刑し天下に厳令を下し無
有ことを正しむ

○武具取隠し所解へ渡しより賊船荷物取ぬ
一 花色縅具足七十領　一 卯花縅具足八十領
一 黒革縅具足五百余領　一 萌黄縅具足二百領
一 銀鍍金甲八十兜　一 赤銀鍍金甲百兜 但有ふし
一 刀腰元三百本十腰　一 長刀八十振
一 鉄炮二十三挺
武具の外荷物
一 硃砂七百斤　一 猩猩緋千枚
一 海嵐三百斤　一 纜筋七百連
右之外食物其外品々数種これあり

一　十二ハ端帆一　一帆柱一本

一　莚ニ百枚

右ハ外ニ有之候由

右之舟ニ乗候者共名

肥前国平戸者只今八人　與三右衛門　又兵衛　九右衛門　七左衛門　門田甲山者一人　加右衛門

築前国星野者三人　次郎兵衛　孫兵衛　権兵衛

筑前国田島山の者二人　作郎（?）　孫右衛門　壱岐国者二人　孫七　利八

右今元仕候者

右之者共自殺ニ候

○正徳三年ニ
巳ノ三月十日之夜中より対馬国豊浦沖ニ而七

艘ニ而東風ニ而七八里程も沖へ出候処数日漂

流仕候而朝鮮国の境ニ当り候由ニ而漂流仕

候由ニ候、此ハ則番船ニ而御座候

右之船長崎迄送り届候様ニ被仰付候

右之船頭ニ候者ハ右之者共只今仕候者共

来ル年今度船者共ニ而中々残り候

ニ付候　此次第ニ被仰付候

国ニ送り候様ニ被仰付候文　又大坂ニも具ニ申上候

此段申上候

○或問答書之穢不申候而も更ニ無之　又ハさしまし不

○桟敷　桟の字ハ桁之間ニ用ル棧此合棧乃ニ似たるなし　假庪（サじき）旧事記ニサスキと訓セり庪字ハ庋と同し閣ニ食を置

今ハさじきの文字をとりとりに書れり旧事記の字を用ゆへき

と云事なし但假庪の字ハよしありけにきこゆれと棧敷の字

ハ古く旅故寛弘四年四月加茂祭の条下等ニ見ゆ桟敷（サじき）の字古きにや

見えたりさじきさじきと呼も難るなかり

野府記云寛仁三年四月六日乙巳寄相門車向一條桟敷

○乃車見之云云

○工藤為憲ハ伊東狩野河津天野二階堂等数十家の祖

之伝れの世の人々を善云天慶の三年平将門征伐の時軍功

ありて後ハの我よ為憲の弟為重ハ共ニ死セしと左京亮

常よろこひ伝ふ又後拾遺集八ニ遠江には為憲侍りけるか

あふきの扇をかきかへしたゝめる　左京為信朝臣

わすれての比ともの年のなかとて花の都をおもひそこせよ

と侍れハ醍醐朱雀村上三代の比の人をとかへしに武林の

南家藤氏ハ悉く為憲の後裔之

○無量寿経の十念ハいつれも一佛の名を称すること諸経

要集よりいつる十念ハ是より異之念佛念法念僧戒念施念

天念休息念安般念身念死也よりて中休息とは閑居

して安心休息をとるなり安般ハ胡語安那ハ遣来と訳

般那ハ遣去と訳ス出入の息を数息の法にして及数息一般

のこと天台止観の終り等も是後教なりと云り

○空積經に所謂麁傍毒第八何ぞや經律論秋法教の
第七に見求他過自覆已過を三麁傍とし邪命為利養
楽求聴法を二毒等とせり

○中世持明院殿と称せしハ後伏見花園両帝及量仁親王
等いふ也持明院をいふ仙洞の号とするの權輿は安楽光
院記にいへる院同安楽光院ハ大蔵卿通基建立之但
其初ハ又基頼康和年中に廟門の持仏堂として一宇を
建て持明院と号まて大治年中通基朝臣虹梁の擁を
揚け供養せし家を遂てる是故一家の称号とし持明院と云ふ其
仙洞を後安楽光院と称す農祖中納言基家卿の妻
陳子北白川院と号も 後高倉院の正妃たるより持明院の私宅に
御当宿多年此院に在世に持明院の宮と称せしを御子
関東の挙によりて帝位に立給ふ是堀川院にて皇子
四條院也此の時父皇持明院を以仙居とす四條帝
後嵯峨院亀山位等其の持明院の私第自然と代々の仙居
となれり

○鵜殿三郎泰長持ハ三河西郡の人其先ハ紀州熊野新
宮常當七人の供僧一員として後に武方の軍事を勤信
濃宮に仕へ其後三州に入来持ハ駿州の今川義元及び氏

其の魔王ある属なり

○宣和西讃　耗搶天王　護法天王　行道天王

雲蓋天王　鐇塔天王　遇海天王　降塔天王

北門天王　棒擶天王　遊行天王　渡海天王

此むね多し此中ち雨間斗聚天王武塔天王なとあり

○戊申件夏廿八勢家又い当社八行なる麻績灘の古蹟

嶋をえて渡られ沈海ありなれこめて久しく見さし

田面めつらしく井戸田の西の小径を南しそやりて山際

の橋かね海老をいかく遠帆的ふなむ渡し此望

ありし東方の御嶽あれを宮渡れり笠寺に入行しま

りふ八恒例の殺い神精縁まさ人多くまいり行へける

あり八星くもりるるしも気いやいしつのくしるも

いとしいそうし天白川あれを長堤松さうく川

浪みとり流れ穗に秣る芦の茎を掘るいとき浪立也

しよみそま涼し

夏分の縁のまへ風をうて門えまとしき松の下路

幽谷山そし丹家の城山をめくり当海の東ある鳴海

の社八徳に東まへ向り堺中なる岳まて祠八遥か山

の方まて立まも見ゆまさる東征の時御杖つけさせめへ

るとぞ代この延喜式たり文治二年三月の宣命にハ

正三位を授へさせましけるとかや 此時に今度新勝

の大銭を関東より貢しけるとかや 新銭の事漸年頃に

打出てつるが為とし侍る 銭は径一寸二分余ありて 二泉といふ也 是年より

宝永通宝の文ありて 裏郭に永久世用の小字侍る也

十銭に用ひ侍る趣き申しつけて 天下に令せしめられたる大銭

行はれずして廃しぬ 是に天平宝字四年三月十六日の

銀銭を新に鋳て 銅銭萬年通宝 十文にあてゝ用ひ 又承和

元年十二月新鋳の銭 文承和昌宝と云 以新銭之一当

旧銭十と詔書に見へたり 是も大銭にて 前々中銭ハ泉

之周流して世に偏く 人々に行ひける 門のごとし 侍る

富るれども貴賤はなくして酒家の銭をはらへ 見ざらん

なかれ 不貪得須知足 幾人か得之と古詩を誦して

瑞禅寺に入て仏に交の宗祖大徹禅師は應永十八

年二月五日化を下中に 古中にありて そこに此殿の営

よりけれ ふさき門の橋をこへて善正寺といふの城址を稀

に有松村といふ 村よりの袖をひくへば 庭形枝折まで八町

といふ所 山下に寄る所に いつくの社ぞといへば 何の

山のあたり 松の大きやうなる所と杉の山路より右の方草

稲荷の森 秋葉をひげて 山村一人侍りて 古塚ありけ

見ていとおもしろし ここ人へし 実なる 天満宮の社ありけると云

立たりといひ伝へしが此翁の咄をしるして此を記しは
此塚の西南の方斗り山際の松をさして何れそれは屋形
義元公討れ給ひの場にて申りて埋まし所とこそ聞伝之
侍る又より向ふの山を屋形の根と申すを此屋形へ
さし向ひ権伝が山の上なりし塚ハ松井某 五郎八郎宗信 の殉死
せし古墓の塚ハ此家臣七騎のうちと申て伝ふなりといと
譲まうにて語り伝ふ此今我書籍等而して門葉の説多
く且ハ附会屋敷をつくるハなるまじく只拙き治部大輔義
元朝臣の方の軍を軍八千三千張略し永禄三年庚申
五月十八日本郡沓掛の里より大高まて出向十九日の朝此所に
息ひ給ひしに手勢わつか二千に足ざる勢をもて太子の根
より二手にわかち一手ハ駿兵の先手にかゝらせ自ら南へ
出来て田楽の窪の本陣を後より襲ひ給ひし駿兵
思はず驚き乱れ殊に大雨疾風の中敵味方も見わかず狼狽
樹下にて義元陣又乱れ指揮もなく御馬廻り揃ひて防ぎ
小平太毛利新介某某同時に組入義元の首を取
しとて駿兵狼狽して東へ退き尾張勢追討て首を獲
る事二千六百余級其中名ある将士六十余人と伝ふ士塚
といへるハ姓名も不知唯首級一ヶ所の骨を埋し時なり
行ハ又よりて人々伝る様よ咄伝る嗚呼流年猶々として久

四ツ仕る花とし七人南北二昭史記を筆し白碑墨に
傳ふのこいまだ生子一母の帛文多くその名跡を断えされ
作り一葉一杯に入るの者たさしき末世に感を加えし
世家の名跡は終りし亡八めし是命ふるべし家運祖
賢景正しく菩提の下草ならしき家名継傳ぶ幽
君の名跡かうりしと今は申せきき松を植まらて
一旦の居墓をなくと建りて

黒雲浪吼倒南溟　鵬翼遂雲摧迅霆
一夢黄粱百年眼　蕭々荒草又新青

昭る八百四十九年の遠忌は雨にまもとむきかれ帛なる
人ゑおきはりれかりき七節に死し骨を埋し士卒の
幽魂白骨の忠しとも絶へらく松風鬼哭の声を添募るら
愁然の煙を隔まちんしそ出しけれれが今川の流れ
九へをましして今もなき斎関東の家に骨もぬ主の跡とう
詞とひぬいぬや接るに義元の后その後是も家来なく主幸
明海城をたもち信り一戦いやしかれとして信長に降り
亡ぼの首残気は浅きて波席に坤り墓きぬ了はいくるをしと傳
へ伝りれは定めてりの跡は此墓も傳ふん文反宝に一班の
塚なりし松を去りしのは名跡なるや一片山川万古豪雄
将典發共瘞精夫羌不愧英雄主句踐於今要玄哉と

怨江勅山ヶ嶽王甚ニ当り女人の韻を和せし一絶の
なりとしを誦して帰り侍りし

或説ニ信長義元の首を駿府ニ送りて後清須ニ而
寺町瑞賀寺ニ塚を築き義元塚と称して今ニ有り
しとニ△一説ニ信長駿河の同明権阿弥を真へ命し
侍十人を添て義元の首を送らる又其死体を送り
彼処ニ納め埋むとしとこ

故從四位下行治部太輔兼駿河守源朝臣義元 父増善寺 修理大夫
氏親朝臣母中御門 大納言宣胤卿女也　号天澤寺殿秀峰哲公大居士
桶狭間村の北田楽狭間 一ニ田楽ヶ窪 とも云ふ程

母家へ一里余 戌亥　善正寺へ二十七町余 戌
中嶋へ二十町余　鳴海へ二十三町余 戌亥
有松へ八町　中村へ一里半 戌亥
丸根へ一里半 酉　鷲津へ一里半 酉
大高へ一里半 西　沓掛へ一里半 卯
桶狭間の圀ハ小さき田ニて今ハ水田となりて

○田楽ハ地方の名を云ふ所の神楽より割出しまとくまり蔵
之り此名法師楽の神楽ハ八様の名残なりと古からの云ふ
すべからく其の作りや

○白蓮庭　広修雅法師聴誦法華経歌

釋達道 釈迦名也慶宗法師通極論 大覚金仙 宋徽宗所改仏号 那羅延

天力士名 跋闍羅 金剛也 那謨婆南 此云合掌仏

釈氏翻譯これらの義多し

外景経道書曰玉華精水 心中津液 灌霊根 舌也

鬼宮之大帝 北帝帝君也 道書事要言人集 是釈氏不謂妓見并

○統耳読云大西洋国有異人二姓利名瑪竇一姓郭名

玉祐云云至東粤居十年登余陵云云自称西洋無常

主惟生而好善不近女色者而名天主奉国奉之云云所

挟異宝不可縷数其日取奇者有一天主図云云自鳴鐘

致賚石鉄絃琴云云方金一塊長尺許起之則層々可披

閲乃天主経云く

按るにこゝに二人契利支當の魁首として明の神宗被邪

法を述べ宗門を帝に京景物略にも見えたり

考段 弟出し乃ち異なる 不審

○竹腰乃孫ハ濃州新友の家人也乃三子又子孫の時乃三と

討るかけり

或説云乃珍ハ伴の一流にて初ハ竹腰掃部正助と称

古後積艤云かゞ臣に乃三濃州を有て後これより仕ふる比

是右衛門正安と称して竹腰勘右衛門といふ。森某の原氏

某法與して原氏の子竹腰助乃帝 或ハ阪氏正安の子なり

と称して新発波房の後浪々国家に仕へし故ある浪人

山城守志のよ作り是山城守正信の父を或云竹綴
乃弥いかし作と木の末流作とハ縁と和語也とて篠
張綴と云ふ也て初ハ竹綴と称せり或曰乃弥ハ濃
州竹藤村の人なりとも見れ是本の事と志とも

○異姓名流ノ諸家大概

近衛信尋公 後陽成院皇子 一條昭良公 信尋公弟 正親町季秀

源重保男 持明院基定 吉良義助男 以上藤氏

庭田経資 藤原方有男 白川雅陳 藤原永孝男 廣幡豊忠 久我通明男

以上源 東坊城盛長 菅原為康男 以上菅氏

○同武家 保科正之 秀忠公男 後号松平 岩城貞隆 佐竹義重男

上杉 長尾輝虎 久松 本菅原定勝称長沢 松平 松平下野守忠明 奥平信昌男 号松平

康俊 酒井忠次男 本多中務大輔忠国 松平刑部大輔 源松之男 本多縫殿助

藤喬朝 元白山城守 忠男 小笠原左京大夫信之 酒井忠次男 秋元但馬守

山城守利忠 稲葉丹後守正利男 牧野周防守康重 東条周防守 本多家男 土井

番羊周防守 吉良義男 内藤駿河守清長 水野源守正男 内藤左京亮政真 女男 内藤若狭守

大河内秀綱男 松平丹波守康重 本姓戸田 松平右馬允正綱

松平丹後守重直 小笠原秀政男 松平周防守忠次 本姓松井左近

主殿頭忠總 大久保忠隣男 相馬長門守義胤男 石川

重高 小出吉英利男 九鬼式部隆真 松平伊勢守 板倉 安政 堀田 佐竹 中将源 板倉

九鬼大和守隆方 柳生

宗有男 堀養作守親常 近衛織部正男 西尾丹波守忠永 酒井重忠男 堀山

美部女浦利須 那須遠江守資禰男 市橋壱岐守方 備中守長旅男 久留嶋錦之

脇坂淡路守安□男 太田宗備前守典清 織田小重帯男 柳生帯刀宗重 長門守長恭男

男

○南紀略志の抜書

紀伊国若白山 若山村三十上手折り松のとき七丈余若菜又後ろに白木を定 巨勢全国拾松之滝右

大野庄□河村南一丁より三十三丈余り一尺 已上名草郡

倭玉浦 那賀郡 津田瀑布 有田郡小南村 已上海部郡

日高川 源は大和国より出紀伊国の境焼尾山より出北境の村にて海へ入 千里浜 南部山内村更に歌あり ……

已上日高郡

盤田川 父任王子社大般若崖 有馬庄古□村の東北岩より廿六丈巾一丈三尺 音無滝

牟婁の西六町ばかり 已上牟婁郡

王津社 成年氏社 和作庄関戸村南二十町 冬大山日神竈

山神社 和作庄和多村西二丁余大湫倉之 日前社 和作庄卯田村積号国造紀氏天彦根の裔之 伊太祁曽

神 山東庄存在郡号神 已上名草郡

粟嶋神 加太庄賀茂村の西 玉津嶋 和歌浦南明光浦と称ス 已上海部郡

産田神社 有田村花の窟あり 熊野新宮 号今出関山古く白王代の説景行天皇十八年建之

神倉徐福祠 花多村 那智山 号法峯慶寺 市野々村西北 瀞ノ淵 天家村剣天ケ峰下

本宮 新宮の西北七里余白皇代 崇神天皇六十五年建之 已上牟婁郡

小野寺 山田庄日高村の北大町伝云小野小町熊野に詣て此の所にて死すと云たり 道成寺 那賀庄梶又村入安年中秀明上人の開基

あり
と云

又 元応寺 後光厳院勅願所 西山ニ有 金剛宝寺 号紀三井寺 紀伊国紀三井村の 東ニ在 弘仁八年 名草山 宝亀年中建立

惰可山禅林寺 天平年中 紀伊国 河村ニ安置 薬師仏 有武帝勅願所 已上名草郡

普陀山長保寺 長保年中上那村 長保年中一条院勅建 鷲峰山興国禅寺 已上海部郡

初号西方寺 安貞元年 葛山の麓入道
願性建之後 由良の行禅師中興

粉河寺 粉河庄粉河村 号世音寺 宝亀年中の建立なり 国分寺 那賀郡東国分村 の北三町

一乗山根来寺 伝法院 山崎庄 西坂本村 已上那賀郡

高野山金剛峯寺 去慈尊村の 三里ニ有 已上伊都郡

道成寺 矢田庄土生村 の西山下 已上日高郡

大蔵虎隠 池田庄野田村 南二丁ニ有 已上在田郡

平維盛隠居 山地庄竜神村の 東二里程谷ニ有 已上日高郡

右者享保壬辰紀州人教明所撰の南紀略志を抄
して遺忘ニ備ふ

○隠岐国周吉郡西郷古府ハ矢尾村ニ有之
豊浦姓子命社 出雲ニ有 従一位上水祖明神ト云水
祖ハ式内の社 同所古ハ根抜の西山後ニ在を東坂
良明神ト号 又比売神社と称を 至徳ニ従一位大名
神と号 同村今寺山昔ハ寺有今古墟存せり 明暦
年中石垣の跡今にありしを 修補せり 開基ハ寺
斗の年月のしれさるよし 小壇の仏像を彫刻して置けり
ゆり村民寺異トし是を神として崇め小祠を営て

納む

屏風山の西蓮花寺の東海岸の海二町ほど牡也牡蛎と
いふ物月として有るは此地の牛なり。 おほつゝみ海をさへ
出まで路よありし浦人つねさし免藤倉に貢しけり生
ある食ひけり兵庫に来合と申しとて
大久保金摺といふ所に祠を山海清静なり夜散笛の音を
常すありしいわれとかん
○ 東の大満寺北の山跡に浦宮と云あとむかし漁父釣致ほどに
一巻の石を網の中より是を寺として小祠を作り其石を
納む溯七八年を経て祠に満板を敬りて出る所なり

改作り寛文七年の洪水に石流に七尺余ありて祠の板碑
又破れしを見出しと云元吉村八王寺の社ありて其寛しるす
光乐寺の祠と合て三年に一度祭る是は日月の祭
と称し去以年に日月の像を作り海をとるん坂山の南に
建福寺ありける和尚貞和四年二月所建といふ寺あに
橋本花尻時ハ有年といふ所に世の名橋と云上西村西本
村ハ昔屋橋中将といふ人ここに死せられ
房の前の祠ハかハらし云ふ西本の里の城の下於
とをれりし海路むかし此地に死せしが塚を築きけり
房月と云信寺の古塚に向して

天津風雲井よりけしめしもしの
と申しけて下の句を案じける縁のはより
西頭まて申ゆ遊女の下等よ
とるん吹きよりし雲よ入る待ふ御孔と小野小町といはめく
の絶言よ似たり鄙吏ら古縁に顯して縁上古今集竹
風吹常見て下と誦しける縁中方まて下有百年人
長睡不知曉と詠じたる例し漢和一般の事ろ文武里村
上と称せる民多し是原橋辰の裔と云 按るに原橋
家ハ村上帝の皇子之村氏と又村上天皇の事まふたりと云ろ
されど世系をまつハまで

国分寺村禅院山国分寺と云武帝の勅建三重塔後
ち羽院の時。 つ中興永正元年権小僧都実慶なり
尼寺村是古の尼寺なり 尼寺の跡なり
下西村惣社ハ天武天皇の勅にて其式に所謂出若郡
命一座と見之出張中ハ正一位出若郡大名持と云社日を
命ハ出遊と云小王遊出宛を携るのよ云を以玉遊ハ出神
天皇の御子十挟彦命を云則小田郡に鎮り 里
鶴明神或ハ所謂加茂郡俵神社と云の出張に従五位上
加茂郡名社と宛せり
谷合村国明神至徳元年平浪の金蓮寺の傳譜かけ社よ

通夜しける夜に荒まさりつゝ猿沢の池の蓮ならんといふ句を
見て御来の後堂上の人々小若て百首のうつゝ歌詠ませ
しとく一巻ありき公准三后前関白参議源義将
源高秀 爰源秀 長下部兼熙 忠頼 神祇権
兼敦 大中臣行広 女平貞秀 律師 経当之 式社ハ
正一位天健金草名神之那須潟村の光ある八小野宮吾
迁の時初ハ鴻おの豊国里に居し後ニ那須の横尾
山ニ住し御路にありし地蔵の像を離孔し又一妾は
網さく娠り御来の時妾に告て云汝産して子は育
せバ此像を与へよし別止るの後子を生む那須の長し
かりて此寺を立てうの地蔵を安置せしといふ文雲扇
月ノ比湊の宮社と皇の宮とハ入り
一宮村一宮ハ崇神天皇之而と定めしといふと云
砧村に国宮といふ神社ハ式内伊勢命神社
知文那別府ハいすれ小衛にあり更文を安き伊勢を
祭りし公官の跡之府より北の山の湊をまかにし
いふ後醍醐天皇の皇居の跡之
東白河よ大山名神ますまて 式内従三位
波止ヶ東白の松山へつらり後白羽院也がほ当ありし
しおとて公際に小まをうる芽ヶ新塚の月をまんつと詠

さゝめのしわとこゝ
浦に由良明神の社ハ蒼海浦にましますこの由良比女
神にして従三位の神階あり
和文湊といふ所ハ村の二郡の里山寺ハ古への塔と見え後
醍醐院ましまし御座ありし所と云橋にかゝる本より出そけり
のかれさせ給ひまして此湊より御船出ありし所なり。。
後鳥羽に正三位上和志海神神社式にいふ海の神社こ
またてけるこのちぶりの神ハ日向あるところにしハ
大の木神なり海神那敷の路と呼名。八浦村の乾に
輔時の舟なりし

かりおのおさしめすみくれかいおのれつこのさけ之より
森口源福寺ハ葛田山といふ後多賀院山陵の斎に行
簀を囲しく落葉ふ浅不掃にあそばれしとて葛田池
ハ院蛙の声をうるさく思し召して
蛙なく葛田の池の夕たゝみ聞ゆるものハ松風の音
是よりはかより蛙鳴くことなしといふ元の仁宗大徳中燔
郎ましてて群蛙乱喧をうるさく思ひして大后合を傳て
宮母子債々飛悩人へしと思ひしとのことハ蛙声
多く静かならしと文にまいらせり嗚呼元王ハ後大室に
やかり後多羽ハ達鴻に蘭せ思むべし

我こそハ新島もりよ隠岐の海のあらき浪風心して吹
と叡慮あらせられし 又御製なり
浪間なき隠岐の小島の浜久木久しくなりぬ都隔て
寛永年中後水尾院太上皇群臣に命し和歌詠
なさしめ旧跡を弔みせしめ給ひし 勅使ハ水無瀬中納言
氏成つとめり 和哥一巻なりし氏成の絶行源福なり
絶てなり遠嶋の霊廟ともなるへし
宇津村に従一位。須賀大名神社あり是式内
に而謂ゆる賀命神社ニて名神大社なるよし
神職なり

豊田の湊より一里斗沖に松嶋といふ所あり
小野篁住せし嶋といへり
右ハ隠岐紀略諸記に而載を拾ひしなり出雲
国松江城主侍従従四位下出羽守源綱隆朝臣
之臣に命し鎮地隠岐を巡按せしめ給ふ時述なり
虚に麦井後といへるハ武作若の名なり
○近世宮方ハ関東諸家へ見香を賜りをしめ給ふ捺する
を見いまし 御月日の葉玉の方なるをしや 葉玉の如き王者緑花を
月切りすゑ久し
葉玉の方

しやう 一両　沈香 一両　丁香 五十粒

かんせう 一両　かうのふ 二両

右ハ和家の伝之又方丹家

しやう 二両　白檀 三両　かうのふ 弐分

ぢやかう 一分　沈香 一両　丁香 一両

かんせう 弐分

薬玉一下連十二 閏月のある年ハ十三 一粒の大さ○ 是程をしるし

流り 袋ハ錦或ハ紗練を用緒ハ揚家白清花羽林ち

此葉名家江家ハ花色を用之

右ハ後宮名目の中ニあるたり此事ハ拾芥抄薬の

女御揃箱の中ニ有所作ニて深窓将軍家

中務卿御ハ錦ハ此とらぬ事のやうにかく事ニ見え

侍りこの名目の中今世絶てきえましして

猶ハ附会あらぬ事の如説ありぬとかうんてし正まく

ときらも

内閣文庫
慶應乙丑
昌平坂
国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan